



平成21年度北海道医療大学F D研修報告書

学生の低学力化に対する 効果的教育方法

北海道医療大学F D委員会

平成21年度北海道医療大学FD研修

学生の低学力化に対する効果的教育方法

期 日 平成21年8月6日(木) - 7日(金)
場 所 札幌サテライトキャンパス

主 催 北海道医療大学・FD委員会

ディレクター
阿部 和厚

タスクフォース

井出 訓	及川 恒之	国永 史朗	齊藤 浩司
土肥 聡明	東城 庸介	千葉 芳広	花淵 馨也

目次

はじめに	1
趣旨など	3
参加者名簿	4
進行予定	5
ミニ講義（発表集）	9
ワークショップのプロダクト	
グループ名簿	28
Aグループ（「ええ～(A)」）	29
Bグループ（「B. D」）	32
Cグループ（「Change!」）	37
Dグループ（「Development」）	40
Eグループ（「いい(E)」）	42
参加者感想	48
ディレクター／タスクフォース感想	50
アンケート集計	
プレアンケート集計	54
ポストアンケート集計	70
資料	79
アルバム	81

大学は人がつくる一個々の力と行動するチーム力が支え

FD委員長 阿部 和厚

現在、ブランド大学といわれる大学でさえも、教育の質を上げていくことは、その大学の最大の課題となっています。本学も同様に、これはいま厳しい課題となっています。平成21年度FD研修のテーマは、「学生の低学力化に対する効果的教育方法」となりました。FDは、大学・大学院において義務化されました。そして、実施するだけでなく、成果が現実の教育改善に結びつく実質化を求められています。FD、すなわち教員力の開発は、教員個々の力の開発のみではたりません。大学の将来は、教員が、いまや一致して大学の重要課題に取り組んでいくチーム力にかかっています。

本年度のテーマを決めるに当たって、FD委員会では、各学部学科・学校が望むテーマを汲み上げることから始まりました。持ち寄られたテーマ案から「低学力学生に対する効果的教育方法」が採用され、さらに、FD委員の数名をワーキング・グループとして大学教育開発センター（以下センター）の検討会で内容を設計することになりました。センターでは、毎週10名ほどのセンター教員・職員が集まり、2時間ほどのセンター検討会を行っています。FD研修の内容は、「学力とは何か」からはじまり、3回の検討会で、ほぼ形となり、さらにFD委員会で検討しました。これらのなかで、テーマは「学生の低学力化に対する・・・」と変えました。入学させた学生を低学力学生、成績不良学生、成績下位学生などと区別して対応しようという観念は問題だという指摘があったからです。

FD研修は、テーマ決定後、さらに2回のセンター検討会で細部の時間設計がなされ具体的進行スケジュールが印刷できる形となりました。FD研修は、センターでの10時間以上の討論と数日の準備で行われたこととなります。

FDは、「テーマがあつて、あとは意見交換だけ」では、具体的に反映される成果は得られません。ここには綿密に構造化された進行が必要です。こうしたことができる人材を『FDer(ファカルティ・デベロッパー)』といいます。ワークショップ型FDでは、学生中心授業を体験的に身につける小グループ学習型研修をいれているとともに、細部のマニュアルまでオープンにしています。体験とマニュアルをモデルに、このような人材が育つことを期待するからです。

大学間競争のなかで国家試験の合格率はその学部、学科の将来を決めます。この競争の厳しい学部学科では、少なくとも国家試験に合格できる十分な学力をつけて卒業してもらうことは、社会的責任です。こういった学力を保証しないで全員を卒業させるという無責任な状況はとれません。いれた以上は全員卒業させるということはありません。平成20年に最終改訂された大学設置基準においても、

卒業認定にあたっての成績評価の厳格性、適切な方法により学習成果を評価すると規定されています。また、卒業時に大学卒にふさわしい力（学士力）を身に付けていることも、いま大学教育に厳しく求められています。本学のように入学定員数の確保、入学者の学力保証が厳しい多くの大学は、入学させた学生にどのように求められる社会的水準力をつけるかで、様々な戦略を展開しています。

このような厳しい現状では、まず、教育の質の向上が重大な課題であり、責任となっています。これには、全教員が、日本の教育の現状を鋭敏にとらえながら、互いに一致協力して、本学の教育力向上を具体的行動で実現していくしかありません。また、毎年、変化する学生に応じて努力していくしかありません。そのためには、まず、現状を具体的に知ることから始まります。そこで、今回のFD研修では、はじめに、各学部学科学校における「学生の学力の現状」を紹介していただきました。そして、この具体を根拠に個々の学生を視野にいれた教育の努力を進めることとなります。ここでは個々の教員の力が重視されます。

松田一郎学長は、FD研修の最初の「望まれる大学像」というお話のなかで、『優秀で、積極的で、協調性があり、学生に愛情を持ち、行動規範を厳守する教員の確保が大学の将来を決める』と強調されました。そして、最近、作成された私立大学教員倫理綱領（日本私立大学連盟）、「大学教員の職業倫理の基盤は、基本的人権の尊重と知的誠実性を貫徹すること：1）所属大学に対する倫理、2）学生に対する倫理、3）同僚に対する倫理、4）研究者としての倫理、5．社会に対する倫理」を紹介されました。最後に、松田先生の授業をうけた学生の感想「改めて＜医療現場におけるその人らしく生きるための、個人の尊厳、医療従事者と患者さんの関係＞について考えさせられました」で結びました。

大学の発展は、教員力によります。教員個々が教育力を常に開発・改善していくとともに、大学が求める改善を具体的行動で開発・実現していく教員個々のチーム力が重要となっています。

趣旨など

平成 21 年度 F D 研修

メインテーマ：学生の低学力化に対する効果的教育方法

主催：北海道医療大学（F D 委員会）

期日：平成 21 年 8 月 6 日（木）、7 日（金）

場所：サテライトキャンパス 講義室 A・B

プルデュースター：松田一郎 学長

ディレクター：阿部和厚 F D 委員会委員長

タスクフォース：F D 委員：井出 訓、及川恒之、国永史朗、齊藤浩司、千葉芳広、
土肥聡明、東城庸介、花淵馨也、

タイムマネージャー：国永史朗、千葉芳広、花淵馨也、阿部和厚

事務：嵯峨由紀美、菊地啓之、滝田雅子

趣旨

国家試験の合格率等と関連して、本学の各学部・学科等における初年次から卒業年次までの学生の学力の課題への対応策、とくに学生の低学力化に対する効果的教育方法等は、本学の最重要課題の一つであり、学部学科等の全教員が一致して対応していく必要のある大きな課題となっています。また、本学の学士課程教育における 3 つの方針とも密接に関連します。本 F D は、参加者相互の協力により、本課題解決へ向けた具体的方策を生み出すことを目的としています。

作業目標

- 1) 学生の低学力化を多様な視点から把握できる。
- 2) 学生の低学力化の要因を解析できる。
- 3) 学生の低学力化に対して多様な方策を具体化できる。
- 4) 学生の低学力化に対して多様な方策を実現できる。

研修形態

- 1) 能動的体験型学習とする。
- 2) グループ作業、討論を繰り返す。
- 3) 小グループ学習方式とする。
- 4) 普段着で肩書なしの対等な意見交換をする。
- 5) 建設的な意見交換から建設的対応策を生み出す。
- 6) 提案を具体的に実現できる。

タスクフォース：F D 委員が担当する。

F D 委員はグループ員の一人として作業に加わる。

- 1) グループ作業の方法をリード
- 2) WS でのゴールを提供
- 3) グループ作業の進行指導 必要であればゴールへの作業の軌道修正
- 4) 時間進行のリード

平成21年度北海道医療大学FD研修参加者名簿

*氏名:職名順/アイエオ順/敬称略

所属(学部・学科等)	氏名	専門領域等	備考
薬学部	9名 (初) 齊藤 浩司	薬剤学(薬剤学)	
	(初) 関川 彬	薬剤学(製剤学)	
	(初) 唯野 貢司	実務薬学教育研究	
	(初) 松本 真知子	薬理学(病態生理学)	
	(初) 小林 大祐	衛生化学(衛生化学)	
	(初) 寺崎 将	衛生化学(環境衛生学)	
	(初) 柳川 芳毅	薬理学(病態生理学)	
	(初) 久保 儀忠	薬剤学(製剤学)	
	(初) 大島 伸宏	生命物理化学(放射薬品化学)	
歯学部	11名 (初) 斎藤 隆史	口腔機能修復・再建学系(口腔制御治療学)	
	④ 東城 庸介	口腔生物学系(薬理学)	
	② 谷村 明彦	口腔生物学系(薬理学)	
	(初) 長澤 敏行	口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学)	
	(初) 會田 英紀	口腔機能修復・再建学系(咬合再建補綴学)	
	(初) 澤田 敏彰	口腔機能修復・再建学系(クラウンブリッジ・インプラント補綴学)	
	(初) 豊下 祥史	口腔機能修復・再建学系(咬合再建補綴学)	
	(初) 森 真理	口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学)	
	(初) 尾西 みほ子	口腔生物学系(生化学)	
	(初) 小林 美智代	口腔構造・機能発育学系(保健衛生学)	
	(初) 田巻 玉器	口腔構造・機能発育学系(組織学)	
看護福祉学部	10名		
	看護学科	② 井出 訓	老年看護学
		② 三國 久美	母子看護学
		(初) 福良 薫	実践基礎看護学
		(初) 明野 聖子	地域保健看護学
		(初) 雉子谷知子	成人看護学
	臨床福祉学科	② 石川 秀也	医療福祉政策学
		(初) 佐々木明員	医療福祉政策学
		(初) 佐藤 園美	医療福祉政策学
		(初) 坂野 悦子	医療福祉政策学
人間基礎科学	(初) 櫻井 潤	人間基礎科学	
心理科学部	8名		
	臨床心理学科	② 土肥 聡明	社会心理学
		③ 中野 倫仁	精神医学(老年期精神障害・産業精神医学)
		④ 齊藤 恵一	言語心理学
	言語聴覚療法学科	④ 及川 恒之	分子細胞生物学・再生医学
		② 亀井 尚	言語聴覚障害学
		② 大槻 美佳	高次脳機能障害学
		② 福田 真二	言語学・心理言語学
		② 田村 至	高次脳機能障害学
	歯科衛生士専門学校	2名	③ 長田 真美
	(初) 植木 沢美		
大学教育開発センター	4名	⑧ 阿部 和厚	解剖学・組織学・高等教育学
		④ 国永 史朗	人間基礎科学
		④ 花淵 馨也	人間基礎科学
		(初) 千葉 芳広	人間基礎科学
計	44名		

薬学部	和田 啓爾	衛生化学	6日午前/講義
	二瓶 裕之	人間基礎科学	7日午前/講義

【世話役】

プロデューサー	学長 松田一郎		
ディレクター(FD委員長)	阿部 和厚		
タスクフォース(FD委員)	井出 訓 及川恒之 国永史朗 齊藤浩司 土肥聡明		
	東城庸介 千葉芳広 花淵馨也		
事務	学務部教務課 大学教育開発センター担当課長 嗟峨 由紀美		
	学務部教務課 菊地啓之(7日) 滝田雅子(6日)		

進行予定

8月5日(水) 会場設営(事務)

(机の並び 前5列、後にグループ討論用島5つ)

写真撮影用の席

8月6日(木)

8:45 会場入り

9:00 受付 (タスクフォース直前ミーティング)

各タスクフォースの役割確認・授業紹介者候補を検討

9:30 開会 オリエンテーション 阿部和厚(FD委員長)

挨拶:FDの趣旨:WSの意味 効果 意識改革

プロダクトは報告書に印刷

WS さん 垣根なく

2日間の流れのオリエンテーション

午後の最後に「学力に焦点をあてた工夫された授業」紹介

昼にお願い

昼食 夜:情報交換会 FD一環

FDの大きな目的に、教育改善のための人的連携・組織づくり

グループ発表は、OHP 協同

FDの実質化

タスクフォースは、グループ作業に参加する。

記念写真撮影(5分)

9:35 **ミニ講義** 学長講話 (司会 阿部和厚)

司会:松田さん・3つの方針が明瞭になっていて、大学スタッフ・学生がこれを共有し、

その実現にむかって構成員は努力していること:大学の基本条件

「望まれる大学像を求めて」として、本学をめぐる現状、社会責任、

学士教育の3つの方針、本学のあり方、教員のあり方

学長「望まれる大学像を求めて」25分+5分質疑

10:05 **講義** 「学生の学力をめぐる現状分析(各学部学科学校)」 (司会 井出 訓)

司会:低学力といっても各学部学科でとらえ方は様々と思います。各学部学科等で教育を進めていく上での学生の学力をめぐる課題等について、初年次から卒業年次までの現状等をご紹介します。(各講演10分+3分質疑)

まず、最初に、入学生の学力がどのように変わってきたかのデータを紹介させていただきます。

(つぎに学部学科の順に学力の現状を・・・)

(最後に 昼食の案内・ラウンジの案内・集合時間の案内)

1) 本学の学生の学力に関するデータ(偏差値などの推移)

広報・教育事業部 鈴木英二 部長

2) 薬学部 和田啓爾 教授 (教務部長)

3) 歯学部 齊藤隆史 教授 (教務部副部長)

_____ 休憩 (10分) _____

4) 看護福祉学部 看護学科 三國久美 教授 (教務部副部長)

5) 臨床福祉学科 石川秀也 教授 (学科長)

6) 心理科学部 臨床心理学科 中野倫仁 教授 (教務部副部長)

7) 言語聴覚療法学科 及川恒之 教授 (学科長)

8) 歯科衛生士専門学校 長田真美 教務主任

司会：「学力に焦点をあてた 工夫された授業」紹介者紹介

12:00 **昼食** (弁当)

12:50 **参加者自己紹介** (グループに分かれたあと)

タスクフォースもグループに参加。グループとクラスへ自己紹介
(司会：国永史朗)

一人 10 から 15 秒で

13:00 **WS1** 「低学力を実感する具体的場面」学力と関連する項目を多数あげ、整理 30分
(司会・進行 国永史朗) 説明 (5分)

司会：午前の話も参考にブレインストーミング

各グループ5つぐらいキーワードを挙げ、ホワイトボード記述 (10分)

→ 5つのテーマを決定 (10分)

「資料1」 センターのディスカッションであげられたもの

まず、グループ名をきめます。ABCDEをイニシアルとしたグループ名で

それからブレインストーミング 5分 5分 多くを あげ

そのなかから5つ を白板へ

白板：5グループの記入場所 (グループ名 キーワード)

13:35 **WS2** 「低学力の要因と背景」 GW 60分

(説明 東城庸介)

司会：各テーマの要因 なぜそうなるか

なぜ問題となるか

なぜ問題としなければならないか

現状・要因・背景などの解析

KJ法の説明とその利用アナウンス

グループ役割分担

リーダー 仕切り役 (課題の把握、作業ゴールの理解、全員の意見をひろう時間をみでの
作業リード)

レポーター 発表者
レコーダー 記録者 2名
1 : グループ作業の進行に必要なノート (提出しない)
2 : (提出資料を作成)
(提出物は班代表がまとめ、期日までの事務へ)
発表資料作成 : OHP シートで

14 : 35 **グループ発表** (発表4分 討論3分) 40分
(司会 東城庸介)

司会 : 休憩アナウンス

15 : 15 **休憩** 15分

15 : 30 **WS3** 「改善方策 (問題解決方策) : 改善の目標設定」 GW 50分
(説明 及川恒之)

司会 : 取り組みプログラム名 または 授業名「.....」

それぞれの作業目標 または 学習目標

1) 2) 3)

シラバスの表現法を参考に、具体的に (行動目標を明示)

実現可能なことが条件

(プログラム : 教育活動 目標設定→具体的設計→実施→評価→ : PDCAサイクルを含む)

16 : 25 **グループ発表** (発表3分 討論3分) 30分
(司会 及川恒之)

17 : 00 **授業紹介** 「学力に焦点をあてた工夫された授業」 60分

参加者から6名ほど10分以内で紹介 (参加者に事前アナウンス : 午前に選択)

(司会 長田真美)

18 : 00 中間終了 移動 (10分で移動可能)

情報交換会の案内

18 : 20 **情報交換会** [Osteria Sister BEAT DUO] (司会 千葉芳広)

20 : 30 終了

8月7日 (金)

9 : 30 **ミニ講義** 「低学力対策 e-learning について」二瓶裕之 准教授 30分 (質疑含む)
(司会 阿部和厚)

司会 : 挨拶と二瓶さん紹介

10 : 00 **WS4** 「具体的改善方策」 GW 55分
(説明 齊藤浩司)

司会 : 昨日作成したプログラム名、授業名での目標到達のための
具体的方策を設計する。

いつ、誰 (組織) が、何をするか。5W1H

15回の授業設計のように 行動設計

11:00 グループ発表 (発表6分 討論6分) 55分
(司会 齊藤浩司)

12:00 昼食 (弁当)

13:00 WS5 「本FDで提案された方策の
本学での実現の体制と方策」 GW 50分
(説明 花淵馨也)

司会：FDの実質化

提案したプロジェクトや授業を実現するための担当者、組織、体制を設計し、
具体化・実現をはかる。

13:50 グループ発表 (発表4分 討論3分) 40分
(司会 花淵馨也)

14:30 自由討論とまとめ 30分
(司会 国永史朗)

学力 国家試験対策 カリキュラム シラバス
全学教育と専門教育

15:00 ポストアンケート

15:30 解散

備 品

参加者名札 (学部 氏名 肩書なし)

ファイル (A4-2穴) FD進行マニュアル・資料 参加者持ち帰り

◎OHP、◎スクリーン、PC (3台)、液晶プロジェクター、

OHPシート300枚、マーカー、KJ法用紙、ポストイット、記録用紙、

タイマー：ブザー付き (2個)

FDハンドブック 10冊

センター報告 10冊

報告書原稿

① グループプロダクト WS1・2・3・4・5 (文字。図もいれて、第三者にわかるように)

② グループ代表 感想 400字程度

③ アンケート集計 事務

④ タスクフォース感想 400字以内

⑤ まえがき：阿部

プロダクト提出先：教務課 嵯峨由紀美 ysaga@hoku-iryo-u.ac.jp

提出期限：8月31日 (月)

≡ 二講義／発表集

<学生の学力をめぐる現状分析>

ミニ講義 「学生の学力をめぐる現状分析」

偏差値からみる低学力化



広報・教育事業部 鈴木英二

本学入学生の学力低下問題について、2つの側面からお話させていただきたいと思います。

一つは高校生全体の学力低下の問題です。(表1)に過去4年間の本学入学者の偏差値推移をまとめてみました。学部・学科によって傾向が異なり、一概には言い切れないところがありますが、4年前と比べ、偏差値の高かった学科は下降、低かった学科は上昇し、全体的に偏差値50前後に収束していることがうかがえます。偏差値50ということは、ちょうどその年度の高校生全体の中で中間的な学力を持っていることを示していることにはなるのですが、問題はこの偏差値50という学力、各年度を比べると、まったく異なるものであるということです。

高校の先生に伺っても、数年前の偏差値50と近年の偏差値50では、感覚的なものではありませんが、数ポイントの開きがあるのではないかという印象を持っているとのこと。要するに高校生全体の学力が下がっているということで、やはりゆとり教育の影響が大きいと考えている先生方が多いようです。今回のテーマは「本学入学生の学力低下」ということですが、同じように高校の教育現場の中でも「高校生の学力低下」が最大の問題として指摘され、先生方も頭を痛めているのが現状なのです。したがって、仮に入学者の偏差値50を維持し続けたとしても、入学してくる学生の実質的な学力は確実に低下していると考えたほうが良いのです。(表2)に本学のメインの入試である「一般前期入試」と「センター利用前期入試A」の過去3年間の合格者最低点をお示ししますが、特に薬学部・歯学部ではそのような傾向が顕著であることが伺われます。

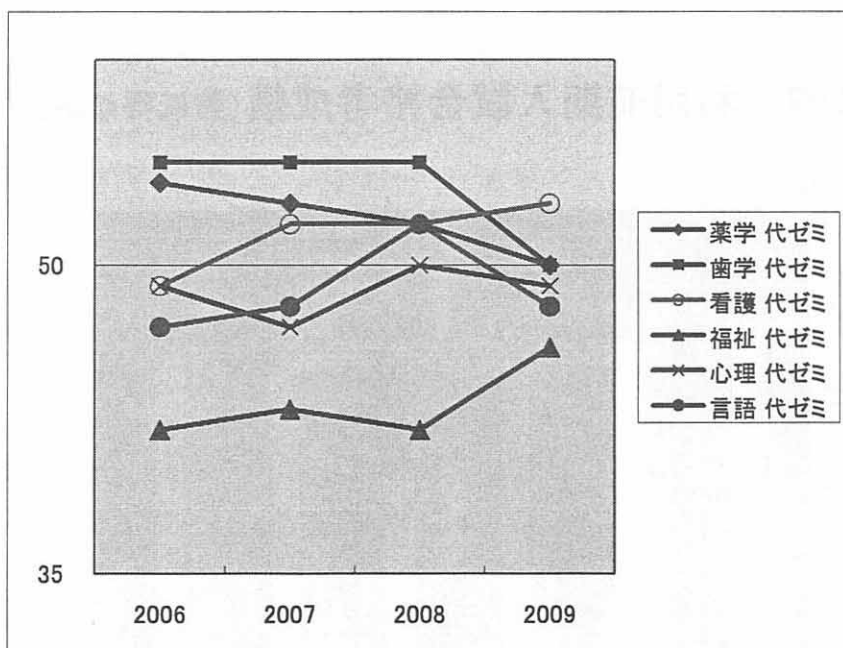
そこでもう一つの問題ですが、本学入試でここ数年顕著になってきたのが、入学手続率の低下です。先に申し上げたとおり、合格者の最低点は年々下がってきておりますが、それに加え、合格者が本学に入学してくる率すなわち「入学手続率」が低下しているのです。様々の要因が考えられますが、その一つとして考えられるのは、高校生全体の数の減少です。本学の入試システムは、まず正規合格者を発表し、所定の入学手続期間内に手続者数が予定よりも不足する場合、あるいはその後の国公立大学の発表で入学辞退者が多く出た場合などに、補欠者の繰上げ合格を実施することになっています。近年は高校生そのものの数が減少しているため、これまでは国公立大学に合格できなかった学力層のものでも合格できるようになり(国公立大学でも大学生の学力低下に悩んでいます。)、その結果、本学の繰上げ合格者の人数が年々増加しているというのが実情です。そのため、繰上げ合格も含めた実際の入学者の最低点は(表2)よりもさらに低いものとなっており、同一年度の入学者の中で学力の上位層と下位層の幅が広がっているのが現状であります。

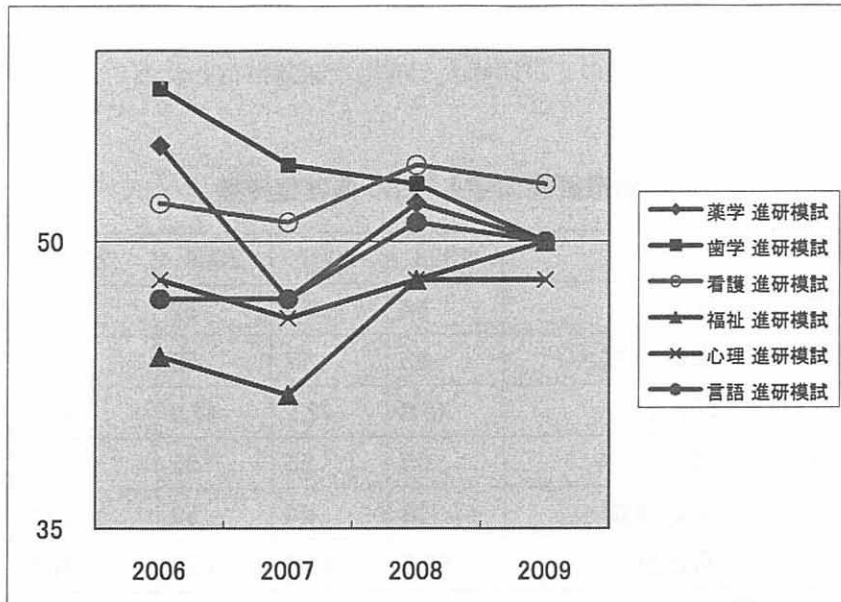
このような二つの問題、高校生全体の学力低下、入学者間の学力差の広がり、現在の社会情勢から見ても早急に改善される見通しはありません。入試を担当する立場として、できる限り、この影響を低く抑える努力をする所存ではありますが、今後もしばらくはこのような傾向が続くものと思っていたほうが良いでしょう。

このような点を踏まえて、今日明日のFD研修会で有効な議論が行われることを期待いたします。

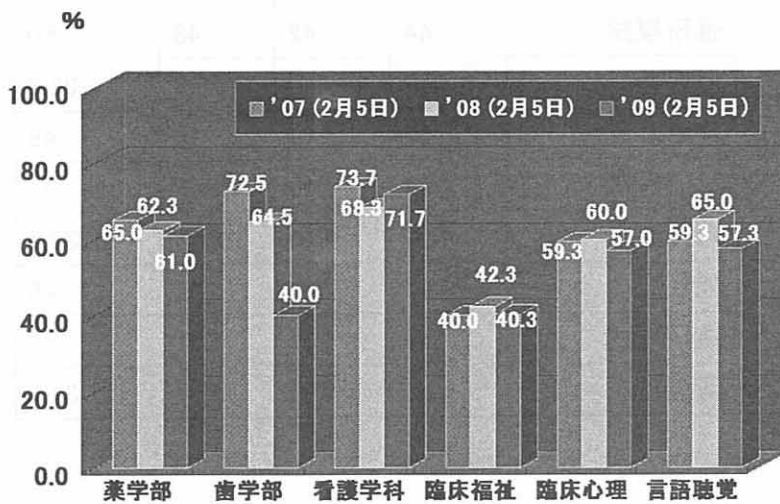
北海道医療大学入学者 偏差値推移

		2006	2007	2008	2009
薬学	代ゼミ	54	53	52	50
	進研模試	55	47	52	50
	河合塾	45.0	42.5	42.5	42.5
歯学	代ゼミ	55	55	55	50
	進研模試	58	54	53	50
	河合塾	52.5	45.0	45.0	40.0
看護	代ゼミ	49	52	52	53
	進研模試	52	51	54	53
	河合塾	45.0	45.0	47.5	47.5
福祉	代ゼミ	42	43	42	46
	進研模試	44	42	48	50
	河合塾	BF	35.0	35.0	35.0
心理	代ゼミ	49	47	50	49
	進研模試	48	46	48	48
	河合塾	45.0	40.0	37.5	37.5
言語	代ゼミ	47	48	52	48
	進研模試	47	47	51	50
	河合塾	42.5	40.0	42.5	37.5

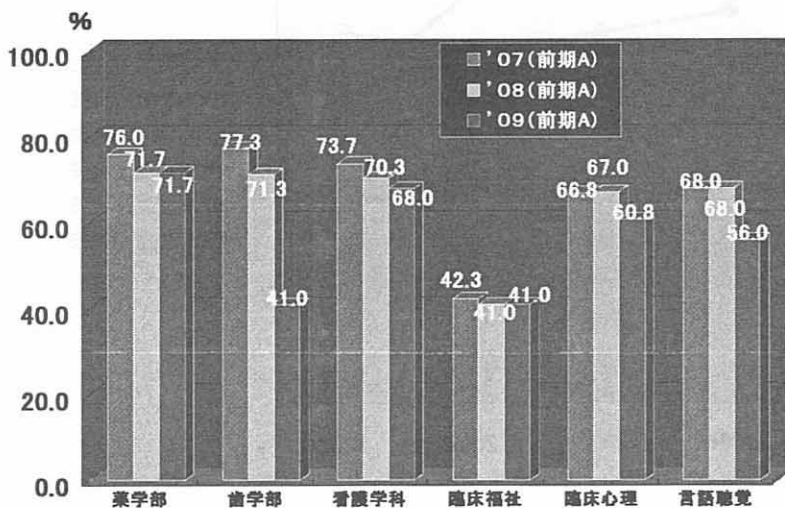




一般前期入試合格者成績(最低得点率)



センター利用前期入試合格者成績(最低得点率)



薬学部学生の学力をめぐる現状分析



薬学部 和田啓爾

薬学部学生の学力に係わる現状について、入試形態と入学時の学力、入学前教育の実施方法と効果、留年者数・卒業延期者数の最近の動向、及びこれらの問題点に対する薬学部としての対策について紹介しました。

1) 薬学部の主な入試改善経緯

薬学教育は平成 18 年度入学生より 6 年制教育となり、学部教育内容はもとより入学者動向等が全国的に大きく変化しています。医療の高度化に伴い、医療現場における薬剤師業務の拡大とチーム医療における薬剤師としての役割の重要性から、6 年制教育における薬学教育の内容が大幅に変化しました。また相前後して全国的に薬科大学・薬学部の新設や定員増によつての影響で定員割れする大学が全体の 3 分の 1 となったため、これらの影響により、本学においても入学志願者数の激減から入学者の学力低下に伴う教育への対応が他大学同様重大な課題となっています。(本学は定員を充足しています。) 入学試験は受験者にとって負担の小さい(受験科目の削減、筆記試験の免除など) 選抜方法の割合が増加し、ひいては大学入学前の学習量の不足が入学後の学習到達度の低下につながっています。(表参照) 薬学部では、入学時から卒業後の国家試験の結果まで各学生の入学時の入試形態、入学時テスト、各学年の成績など追跡調査と分析を行い、入学試験の選抜方法に反映させています。

2) 薬学部平成 21 年度入学時テスト結果

入学時に、化学と生物に関する試験を実施し、入学時における学力の調査を行っています。この試験成績に応じて 1 年前期、後期にそれぞれ「基礎化学」、「基礎生物」、「基礎セミナー」などの補正科目で基礎学力の補正を行っています。また、毎年度との成績の比較から、授業内容を調整する資料として活用しています。本試験の主な特徴として a) AO 入試、指定校推薦などの筆記試験を課さない入試形態での入学者の成績が低い、b) 化学の学力(平均点)が低下傾向にある、などがあります。

3) 入学前教育の効果

1) ~ 2) を踏まえ、薬学部として入学前教育に数年前から取り組んでいます。特に AO 入試、指定校推薦及び 3 年次編入生を対象として、ウェブ上に基礎的な問題を掲載し、自主学習を勧めています。また平成 21 年度入学生を対象として、業者による入学前教育を斡旋しました。教育内容は、化学(受講生 26 名)、生物(同 26 名)、理系英語(同 19 名)について、DVD による講義(各 12 講)とそれぞれの講義終了後の課題提出、個別相談などとなっています。今後、これらの学生の入学後の成績を追跡してその効果を検証する予定です。

4) 留年者数動向・卒業延期者動向

留年者は平成 18 年度までは各学年 10 名未満で横ばい状態でしたが、平成 19 年度よりその数が増加傾向にあります。特に、薬学 6 年制の 2 年から 3 年に進級する学年から増加傾向が顕著になりつつあります。

また、卒業延期者数は、本学の定員増(30 名)後の学年から増加し、全体として国家試験合格率にも

その影響が現れ始めています。

5) 薬学部の低学力化対策の現状と問題点

1)～4)の通り、薬学部学生の低学力化は数字にも現れています。しかし、卒業後、国家試験に合格し医療現場で業務を遂行するためには、十分な学力(対応能力)を備えた学生を輩出する必要があり、またそれが大学としての責任でもあります。このため、1)入学前教育の効果の検証、2)補正教育の効果的な実施、3)学習到達度の低い学生への個別対応など、6年間を通してきめ細かく対応していく必要があると思われまます。

年度	入試方法の主な改善点
2001年度	AO入試導入(グループ討議) 編入生1期生(4年制)
2002年度	AO入試(学力重視個人面接に変更) 一般推薦:学科試験廃止(小論文) 地域医療特別推薦新設 定員150名増:開学以来最多の187名入学
2004年度	地域医療(学力重視に変更:AOと同じ面接) 一般推薦入学試験復活(英語・化学):受験者前年度比約2倍増
2005年度	編入学(4年制大学卒・見込みに変更)志願者増 4年制教育最後の入試:志願者数大幅減
2007年度	試験日選択制導入
2008年度	センター試験前期A方式+B方式導入 試験日選択制(他学部選択受験料無料) 6年制3年次編入学試験スタート

歯学部学生の学力をめぐる現状分析



歯学部 齋藤隆史

歯学部では、平成 15 年度から入学時テスト（生物学、化学、物理学、英語）を実施して、入学生の学力の把握を行い、入学後の学生の学習・生活指導に役立ててきました。

まず、4月の入学時テスト実施後、学生の入学時の学力を把握後、全学生を対象としてクラス担任による面談を実施しています。その際、入学時テストで生物学、化学、物理学において一定の基準に達しなかった学生に対して、補正教育科目を受講するように説明を行っています。生物学に関しては、80点未満の学生に対して「基礎生物学」、物理学に関しては、70点未満の学生に対して「基礎物理学」を受講するように義務付けています。化学に関しては、「基礎化学」の受講を全学生に義務付けています。補正教育科目受講の基準設定に関しては、高等学校での授業科目における学習到達度が十分でない学生に基礎学力を身につけさせ、正規科目である「生物学」「化学」「物理学」の授業内容を理解させるために、各科目担当教員の適切な判断に任されています。

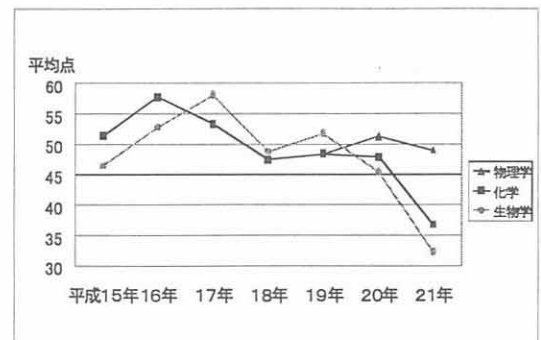


図1 入学時テスト平均点推移

図1に平成15～21年度第1学年学生の入学時テスト平均点の推移を示します。（生物学、化学、物理学のみを示す。物理学に関しては平成19年度から実施。）図1から明らかなように、平成20年度までは、生物学に関しては平成16年度をピーク（58点）として、また化学に関しては平成17年度をピーク（58点）として緩やかな学力低下の傾向が認められました。しかし、平成21年度に関しては生物学・化学の平均点がそれぞれ32点、37点とピーク年度と比較してそれぞれ55%、64%と著しい低下が認められました。

図2、図3にそれぞれ生物学、化学に関する入試形態別平均点の推移を示します。両者ともおよそ同様の傾向が認められます。平成15～20年度では、センター入試・一般入試で入学した学生の学力がAO入試・推薦入試で入学した学生の学力を上回っていました。しかし平成21年度においては、センター入試・一般入試で入学した学生の学力が低下して、AO入試・推薦入試で入学した学生の学力に近づいて

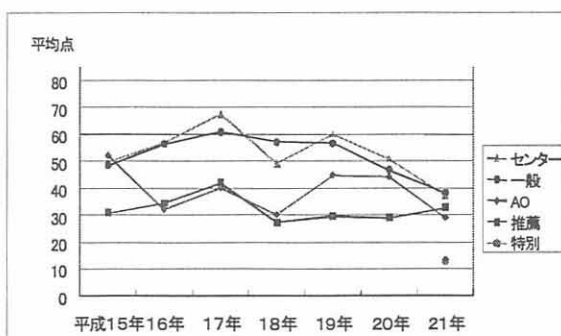


図2 入学時生物平均点推移(入試形態別)

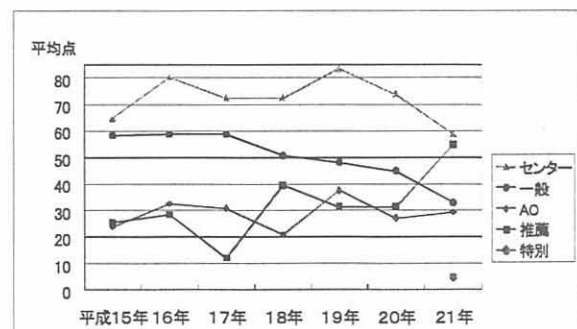


図3 入学時化学平均点推移(入試形態別)

いるのが明らかです。特に生物学においてはそれが顕著に認められました。さらに特筆すべき事実は、特別入試で入学した学生の学力が著しく低いことです。

入学時テスト終了後から、クラス担任による全学生に対する学習・生活指導、補正教育科目における教育および各科目担当教員による成績不振者に対する学習指導といった極め細やかな指導を実施しました。

その後6月に、生物学、化学、物理学において前期中間テストを実施しました。図4～6のグラフはそれぞれ平成21年度全学生の生物学、化学、物理学の入学時テスト得点と中間テスト得点をプロットしたものです。ほとんどの学生の得点が上昇しているのが明らかですが、さらに入学時テスト、中間テストにおいて50点を基準として高学力・低学力に分類し、学生の学力の変化を調査したところ、学生の分布は「低学力→高学力」（グラフ中左上区分）、「高学力→高学力」（右上区分）、「低学力→低学力」（左下区分）、「高学力→低学力」（右下区分）の順に多かったです。

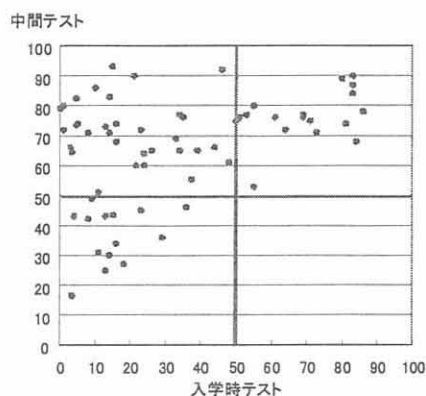


図4 入学時テスト vs. 中間テスト(生物)

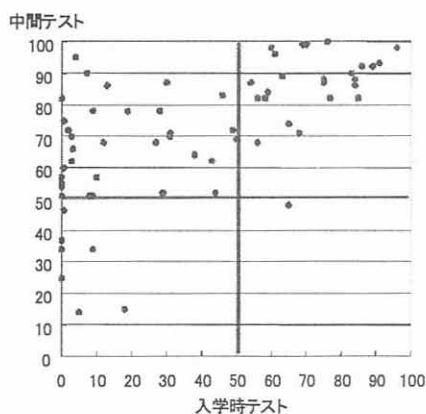


図5 入学時テスト vs. 中間テスト(化学)

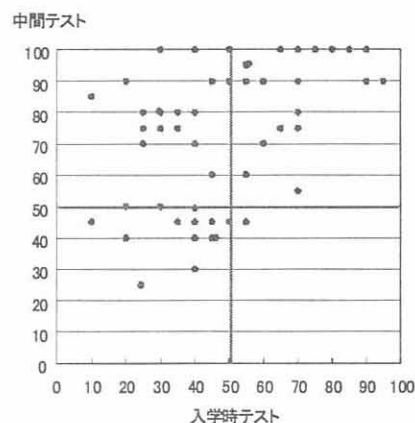


図6 入学時テスト vs. 中間テスト(物理)

新入生に対して実施した入学時テストおよび中間テスト（生物学、化学、物理学）結果から学生の学力に関する分析結果をまとめると、以下のことが考えられました。

- ① 学時の学生の学力は、平成16,17年度をピークに低下傾向にある。
- ② 成21度入学生の学力の低下が特に著しい。
- ③ 平成21年度新入生の中では、センター入試・一般入試で入学した学生の学力が、A0入試・推薦入試で入学した学生の学力に近づいており、学力の低下が認めらる。
- ④ 入学時に学力が低い学生でも、適切な指導によって能力のある学生は伸びる。
- ⑤ 今後、学力の改善が見られない約10名の学生に対する特別な指導が必要である。

看護学科の学生の学力をめぐる現状分析



看護福祉学部 看護学科 三国久美

本日、話す内容の概要を紹介いたします。まず、看護学科の学生に求められる学力とはどのようなものかを考え、次に看護学科の学生の進級および仮進級者の不合格科目の現状を報告します。さらに国家試験の合否と不合格科目の関連について検討します。最後に看護学科における学力をめぐる課題を考えます。

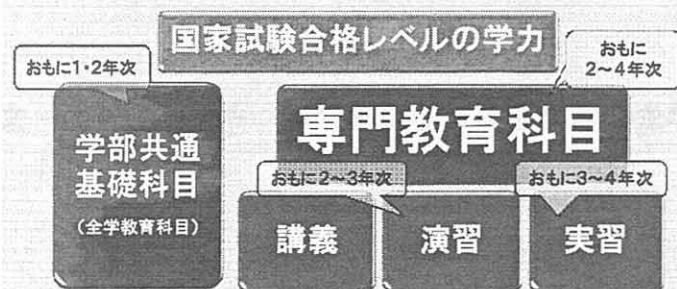
看護学科の学生が4年間で習得を目指すのは、まず、「看護実践に必要な知識と技術」です。さらに領域別実習におけるケアの実践を通して「既習の知識と技術の統合」を目指します。最終的には、看護師および保健師国家試験に合格し、専門職としてライセンスを取得します。これら全てが看護学科の学生に求められる学力ですが、本日の話の中では、学力を「国家試験に合格するために必要な知識を活用できる力」と限定して述べることにします。

次に看護学科のカリキュラムの概要を紹介いたします。主に1・2年次では学部共通基礎科目を学び、学年が進むに連れ専門教育科目の比重が増してきます。専門教育科目は、講義、演習および実習からなり、3年後期になると講義は少なくなり、4年前期までの期間に各領域別実習が入ってきます(スライド)。専門教育科目の担当教員は、多少なりとも国家試験の内容や出題の水準を考慮しつつ定期試験を課しています。先に述べたように、看護学科

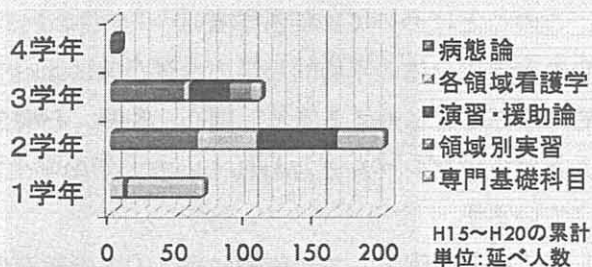
の学生に求められる学力を「国家試験に合格するために必要な知識を活用できる力」とするならば、不合格科目の現状の分析により学力をめぐる課題を把握できるのではないかと考えました。

そこで、平成15年度から20年度までの留年者および仮進級者の不合格科目の現状をみました。年度により留年者と仮進級者の不合格科目には多寡があるものの、総じて2学年に多かった。また、不合格科目は専門基礎科目と病態論が多かった(スライド)。不合格科目からみた学年別の課題をまとめると、1学年では基礎的な知識の着実な習得が課題となり、2学年では基礎的知識の各領域への応用、3学年では演習科目が増加することから、定期試験のみならず、定められた期限内にレポート課題を提出する能力が求められます。4学年では既習知識の統合と国家試験への準備が必要です。

看護学科のカリキュラム



学年別にみた留年・仮進級者の不合格科目



- > 学年により不合格科目の違いがある
- > 病態論、専門基礎科目で不合格になる学生が多い

次に平成 17 年から 20 年までの卒業生の国家試験の合否と在学時の不合格科目の関連をみました。まず、看護師国家試験に合格した学生のうち 14.8%が在学中に何らかの不合格科目があり、病態論で不合格になっていたのは 7.0%であったのに対し、不合格だった学生の 30.8%が在学時に不合格科目があり、その全員が病態論で不合格となりました。保健師国家試験に関しても同様の傾向がみられ、在学中に不合格科目があり、中でも病態論で不合格になった場合に国家試験も不合格になる割合が有意に高いことがわかりました（スライド）。

最後に看護学科における学力をめぐる課題について考えます。まず、学年毎の科目配置の特徴を踏まえ、早い段階から基礎的な知識を着実に習得できるようにサポートする必要があります。また、不合格科目なかでも病態論が不合格だった学生の個別のサポートが望まれます。国家試験を控えた 4 年後期には、学習環境の整備や学習に向けた動機付けが必要であろう。

国家試験の合否と在学時の不合格科目

看護師国家試験の合否と不合格科目

H17~H20	不合格科目あり	病態論不合格*	不合格科目数
合格(n=356)	56人(14.8%)	25人(7.0%)	0.33科目/人
不合格(n=13)	4人(30.8%)	4人(30.8%)	0.62科目/人

保健師国家試験の合否と不合格科目

H17~H20	不合格科目あり*	病態論不合格*	不合格科目数
合格(n=364)	46人(12.6%)	19人(5.2%)	0.26科目/人
不合格(n=34)	12人(35.3%)	9人(26.5%)	0.65科目/人

→不合格科目(中でも病態論)が1つでもあると国試も不合格に

学生の学力をめぐる現状分析 ー主に思考力・文章力を中心にー



看護福祉学部 臨床福祉学科 石川秀也

1. 大学生の「学力低下」の意味

一般的に言われている。「学力低下」とは、主に 1980 年代から警鐘が鳴らされていた教育問題の一つで、このことについて文部科学省は、「今言われている学力低下には二つの面があると思います。一つは今の大学生全体の平均的な学力水準が昔に比べて落ちているという指摘、もう一つは今の大学生は一般的に学ぶことに対する意欲、関心、動機、心構えが昔に比べて劣っているということです。このようなことがトップレベルと言われている大学の学生も含めて、指摘されています。(文部科学省HP)」と述べています。

そして、その要因として一般的には、①大学教育の大衆化による平均学力低下、②大学入試多様化の帰結としての学力低下、③受験競争緩和を目指す教育改革、などの諸点について議論されることが多い。

2. なぜ、思考力・文章力なのか

PISA (Programme for International Student Assessment/OECD 生徒の学習到達度調査) は、①読解力、②数学的リテラシー、③科学的リテラシーの3分野について調査が行われていますが、「読解力」についてのみ概観すると、わが国は2000年度において32カ国・地域中8位であったものが、2003年度には14位(41カ国・地域中)、2006年度には15位となり(57同)、大きな議論を呼んだことは記憶に新しい。

PISA調査にしたがえば、読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である」。むしろ、社会福祉実践において、数学的リテラシー、科学的リテラシーについても極めて重要であることはいうまでもないが、社会福祉実践において、利用者の生活課題を、身体的・精神的・心理的状況、家族構成と介護力、経済状況、社会関係など、幅広い視点から精査し、個々人に適したサービス利用につなげるとともに、エンパワメントアプローチが極めて重要です。

したがって、利用者に最大限の利益をもたらすことをめざし、与えられた諸情報の中から深く洞察を行い(思考力)、それをペーパーとしてまとめ(文章力)、同僚や他の専門職にも正しく理解してもらうことが不可欠です。

3. 臨床福祉学科学生の思考力・文章力と学習に対する姿勢と教員の指導

本学科では、学生の思考力と文章力を把握するとともに、提示されたテーマに対する理解度を探るため、レポートの提出を課す科目が少なくないが、それらの結果と最終的な成績とを総合的に集約すると、①社会福祉専門職に対する憧憬と敬意を持ち、専門職としての価値や倫理に基づき、専門性が高い専門職能人に自ら成長したいという強い信念と意思を持って学業に専念し、真摯な態度で日頃の学習に努力しているグループ(全学生の1割強)、②学習への努力を怠っており、学業への情熱があまり見られないグループ(全学生の1割弱)、③そしてもっとも多いと思われるその“中間層”に属するグループに、大きく分けることができます。

したがって、懸命に努力している学生たちをさらに応援することと同時に、学習に身の入らない学生たちや中間層の学生たちに、社会福祉実践現場の魅力を理解してもらい、学習に対する意欲を高めてもらうため、いかに積極的に、強力に援助していくかが大きな課題となっています。

こうした状況をふまえ、レポート指導等についていえば、①一人一人の学生たちに対して、教員からのコメントを記載、②必要に応じて個人指導、②実習報告書など、ある程度まとまったものを作成する場合は、徹底的な個人指導、③「ソーシャルワーク演習」などでは、“記録”そのものについて学ぶ単元があり、その中ではより実践的な指導、④本学科では、卒業論文が必修となっていることから、さらに詳細にわたる個人指導が行われています。

4. 今後の方向として

“学力の向上”は、繰り返しの学びも重要ですが、そもそも学生たちの学習への意欲がより重要であると思われることから、より臨場感のある社会福祉教育が不可欠であると考えており、定められた実習教育のほか、①1年次からの福祉施設見学、②社会福祉現場の職員の方たちによる講義、③障がいを持つ人々など当事者の方たちによる講義、④入学当初から少人数によるゼミナールの導入、⑤3学年後期から4学年に配置されているゼミナールに体験学習を導入、といった工夫を行っているところですが、さらに努力を重ねていかななくてはなりません。

また一方では、一般常識、公共の場でのマナー、道徳や倫理観に欠けている学生がいる事実も否定できないことから、こうした点についても考慮に入れた教育へと高めていく必要があるでしょう。



心理科学部 臨床心理学科 中野倫仁、齊藤恵一

はじめに

臨床心理学科では、現4年生が入学してきた時点から、授業中の反応の悪さ、私語の多さなどにより、従来の学生気質と変わってきたという感想を持つ教員が増加してきました。最近では、特定学年の問題ではなく学科全体の質的变化であると感じている教員が増えています。以下に項目を分けて現状と対策について述べます。

(1) 高校以前の学力レベルが問題とされる低学力問題

a) 国語力の低下が著しい

具体的例として、「お」と「を」の使い分けができない学生が存在する（小学校1年で学習する内容）。講義内の小テストですべて平仮名を用いてくる学生も存在する（ワープロでないと漢字が書けない）。試験問題中の「・・・について留意すべき点をあげなさい」とあるのを、留意の意味がわからないと質問が出る。試験で学生番号のマークシートを「右づめ」で記入しなさいと指示しても、複数の学生が毎年間違えており、確認したところ「右づめ」の意味が分からなかったことが判明した。

b) 数学力の低下

分数と小数の大小の比較が理解できない学生がいて、統計学の講義についていくのが難しい状況である。

c) 英語力の低下

1年時に実施しています。TOEICの得点が中学卒業レベルに到達していない学生が半数以上に及ぶ。

(2) 生活態度の問題

a) レポートの締め切りが守られないケースの増加

実験・実習のレポートの締め切りを守らず提出しない学生が増加しており、再三の督促にも応じない例が目立つ。学生はそれを問題だと思っていない様子があり、未提出でも進級できると信じているような様子も窺える。あるいはレポートをどう作成していいかわからないということが実情かもしれない。

b) 成績評価に関係ない行事には出ない

植樹祭や防火訓練への欠席者が目立って増加している。従来も防火訓練については、学年が進むと欠席者が増加する傾向があったが、本年度は1年生でも大量に欠席した。

c) 演習科目での欠席者増加により講義が成立しない

発表者でも平気で欠席する。出席しても割り当て分を途中までしか準備してこないために、演習を途中で終了せざるを得ない。やる気の問題ではなく、能力不足も大いに関係していることが予想される。

(3) これまでの学科としての対応

a) 入学前の対応

高校3年生後半の受験勉強がないためか低学力が目立つAO入試および推薦入試合格者に対して、入学前に課題を出し、担当教員からコメントを返すことにより学習意欲の維持を図る。

b) 1年生への対応

2年前より、1年生の担任を2名から8名に増員し、少人数クラスを編成して個別の履修指導および生活指導の徹底を図る。また、今年度から Freshers'講座として、学習と人間関係の形成に必要なスキルを身につけさせる科目を開講した。

c) 3年生への対応

昨年度より、日本産業カウンセラー協会と提携して、課外講義として産業カウンセラー講座を開講し、希望者には3年次の後半に資格を取得できるようにした。これにより、就職希望者の学習に対するモチベーションを維持し、合わせて就職率の向上を目指している。

(4) 教員の対応

私語の禁止およびレポートの締め切りの厳守を徹底することにより規律の維持を達成している教員も存在する。同様に、試験問題および合格基準の厳正化を維持している科目について学生は熱心に勉強している。

再試の前に補習講義を行い、学生の得点を伸ばせた例も存在する。

(5) 来年度からの対応

3年次必修である臨床心理臨地実習では、主として大学院進学予定者以外の意欲低下・実習態度不良が目立っており、学外施設の協力が得にくい状況となっている。そのため、来年度からは外部実習と学内での班別実習に分け、学生の特性と能力の応じた指導を行うように変更する予定である。

学生の学力をめぐる現状分析 —心理科学部言語聴覚療法学科—



心理科学部 言語聴覚療法学科 及川恒之

言語聴覚療法学科の殆どの教員が、近年の学生の学力について、上位層は変わらないが下位層の学生数が増え、「学力の二層化」が起こっていると感じています。下位層の増加の理由は、いよいよ大学全入時代に突入し、本来は大学に入学できない学力レベルの学生まで合格してしまうという「大学の大衆化」が起こってきているためであろう。本学の教育方針として「落ちこぼれない大学」と「国家試験合格率の上昇」という一見矛盾する方針が立てられているため、現場担当の教員としてはどのように両者のバランスをとっていくのかに苦悩しながらこの事態に対応しています。2割近くの下位層の学生は「ゆとり教育」の影響下で高校でも殆ど勉強のクセがついておらず、大学入学後も予習・復習をせず授業について来られない学生ということです。こうした学生は、大学で勉強するレベルの基礎知識がない、勉

強の仕方・まとめ方が分からない、どこが重要なのか分からない、それにも拘わらず授業をしっかりと聞いていない、専門職業人になるというモチベーションが低い、社会常識の欠如や依存心が強いなどの精神的未熟さが見られ、努力を惜しんで良い結果だけを求める甘い考えで、危機意識が欠落しています。追跡調査の結果からは、1年生で成績の良い学生は基本的に全学年を通し成績が良いが、1年生の成績が下位の学生は、留年したとしてもずっと低空飛行するか、あるいは最終的に大学を中退することが見てとれます。しかし、中間層は素直で真面目な学生も多いので、効果的な教育さえ施せば、最終的には国家試験合格のレベルまで伸ばせるので、下位層よりも中間層の教育に力を注ぐべきだろう。

一方、教員側の問題点としては、メリハリのない自己満足の授業、学生が努力しなくても済んでしまうような甘い進級判定、大学の構造的な問題などが上げられます。これらに対し、昨年度から言語聴覚療学科では、学生の意欲を高めるための入学前教育や、ノートのとり方・文書指導などを行う導入教育の他、明確な自己将来像を見据えるための臨床現場への Early Exposure などを早期から行っています。各教員は、数度の中間テスト、小テスト、学生のレベルに合わせた分かりやすい授業などを行い、学生の理解を促すよう心がけています。また、4年次の秋からは模擬試験の他、重要ポイントをまとめ、学生が国家試験に対応できる実力を養成する国家試験対策講義を全教員の協力で行っています。普段からの学生の学力向上に向けた対処法として、今後は各学年での厳格なハードルを設定し、学生の自助努力を引き出すようにしなければなりません。勿論、教員である以上、学生に対する手当てを一定程度しなければならぬのは当然としても、それはハードルを下げて学生を安易に進級させることではないだろう。自助努力をしない学生や気力のない学生まで手厚く保護することは、教員・担任の負担が増えるばかりか、かえって学生に甘えの気持ちを温存させ「くれない症候群」を作り、努力することの大切さを削ぐ逆効果になるような気がします。欧米の大学に比べ日本の大学は「入れた以上は卒業させる」ことが不文律のようにになっているため、学生の自助努力よりも教員による学生のケアを優先させようとする雰囲気があり、そのことが学生に勉強に対する甘えと留年に対する危機感の無さを助長しているようにも見えます。

構造上の問題への対処法としては、現在の多忙なフラット化された教員の役割分担システムから特化された役割分担への脱却や、学生の学力に見合った授業カリキュラムの再構築、学科内協力体制の構築、他大学には見られない特色ある取り組み、入り口での質の担保のための入学学生定数の見直しなどが今後取り組んでいく課題であろう。現場の若い教員の建設的な意見も取り込みながら教員全員が意欲的に協力して進めるような体制作り、すなわちトップダウン形式からボトムアップ形式の一定程度の採用が急務であろう。その意味で、本学の理念と本当の責任を各教員が再確認し、形式のみではなく、いかに実質的内容のあるものを作っていけるのか、また、それに基づき、全学的に学生の教育についてどのように対処すべきなのかを考え、実践していくことが必要であろう。

歯科衛生士専門学校における「学生の学力をめぐる現状分析」



歯科衛生士専門学校 長田真美

【はじめに】

学力の概念、分類や考え方は多種多様であり、語る人の「見方」を示しています。

しかし、本校の教育は、国家試験合格（学力保障）と生涯にわたり即戦力であり続ける「成長保障」を目指しており、「学力」とは、社会的要請に対応できる業務遂行能力と判断し、Technical skill、Human skill、Conceptual skillの3要因を統合した能力として捉えています。（図1）。

学力低下の背景要因には全入時代や定員割れの状況があげられますが、本校の入学志願者は多様な学習履歴を持っており（図2）、短絡的に入試のゲートキーパー機能不全には陥っていないと判断できます。

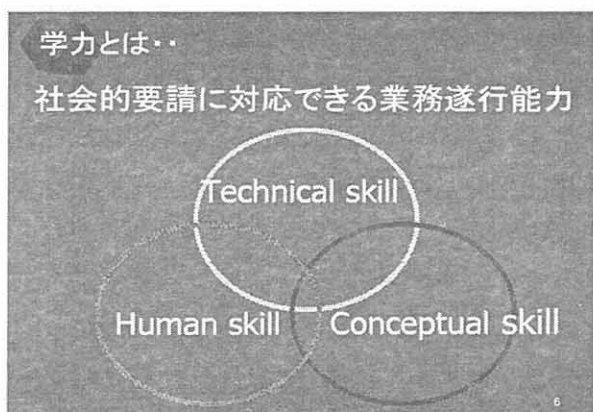


図1 本校が目標とする歯科衛生士の業務遂行能力

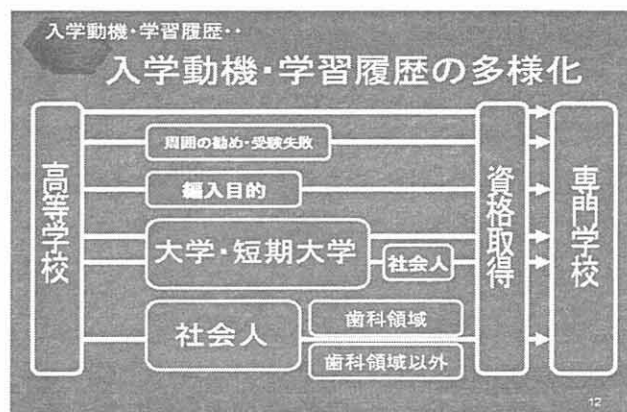


図2 本校における入学者の多様性

【本校学生の学力の状況】

学生の学力を入学後最初の定期試験である「第1学年前期定期試験」を目安として分析すると、平均点別人数の割合の年度比較では、上位学生層は減少していますが、下位の学生層の変化は見られません。また、「最高点・平均点・最低点の年度比較」では、下位層の成績が低下しており、結果的に学力差の拡大が認められます。

このため、教育実践現場では従来の教授方略では通用しがたい局面が見受けられ、教員がどの学力層を対象に授業を展開するのかによって、様々な学生の反応が生じます（図3）。また、在学中の学生においても進路選択や学習困難に対する不安や学習意欲の低下がみとめられるのできめ細やかな個別な対応が求められています。

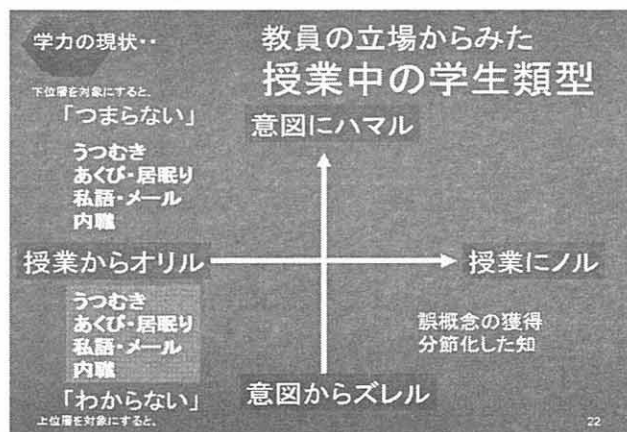


図3 教員からみた授業中の学生類型

【 まとめ 】

以上のことより低学力化への対応としては、まず日々の教員自身の授業のあり方を問い直すことが重要です。その前提として学習者、教授・学習過程、学力の質・量のモニタリング（図4）を行い、現状を的確に把握することが重要です。

また、学生指導には学習動機（図5）の組み合わせを工夫し、多様な学生層に柔軟に対応することも低学力への処方箋に幅を与えられると思われます。

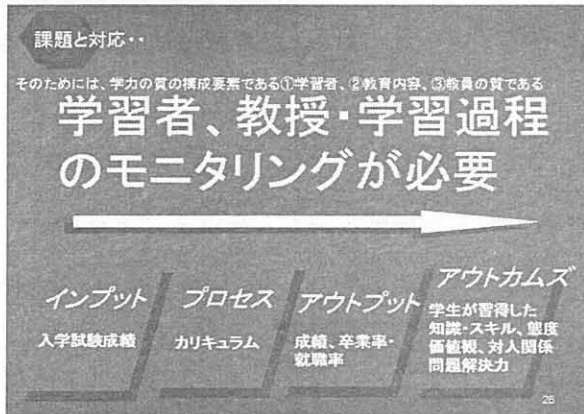


図4 学習者、教授・学習過程のモニタリング

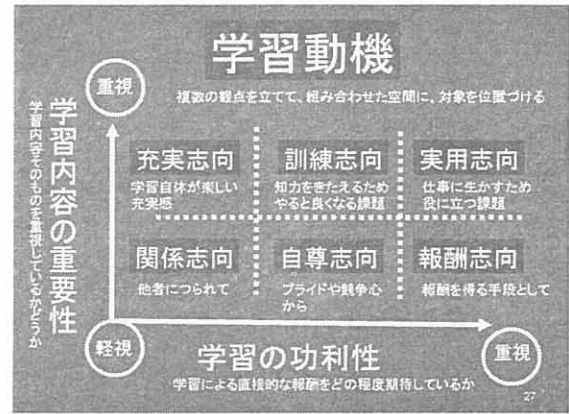


図5 学習動機の種類 (市川 2001)

低学力対策 e-Learning について



大学教育開発センター 二瓶裕之

e-Learning だからこそできる低学力対策について、以下の3点に焦点を絞ってミニ講義を行いました。

1. 授業への参加意識の向上 (学生⇄教員)
2. 学習履歴の継続的な記録 (学生)
3. 学習履歴のリアルタイムな共有化 (教員)

1)の例として携帯電話によるリアルタイムアンケートを使い、授業へ参加することの壁が e-Learning の活用により低くなる効果 (手を挙げる行為よりも携帯電話を使ったデータ送信のほうが壁が低い) などを紹介しました。

2)の例として薬学 CBT 対策サイトを使い、学生一人ひとりが、1、000項目以上(SBO)にも及ぶコアカリキュラムにしたがった学習ポートレート (何を学んで、これから何を学ぶのか) を e-Learning により自動的に作れることを紹介しました。

3)の例としては薬学演習試験解説サイトを紹介し、学生の学習履歴を e-Learning により一人ひとり取りこぼすことなくすべての教員が共有できることを紹介しました。

これらの e-Learning は、薬学部の先生による多大なる協力 (1万題以上の問題や解説を入力していただいています。) があってはじめて実現しているもので、今後も、e-Learning についての全学的なコンセンサスをいただければ幸いです。

ワークショップのプロダクト

- WS 1 低学力を実感する具体的場面
- WS 2 低学力の要因と背景
- WS 3 改善方策（問題解決方策）：改善の目標設定
- WS 4 具体的改善方策
- WS 5 本FDで提案された方策の本学での実現の体制と方策

FD研修グループ名簿

グループ名は各グループで考えたニックネーム

(順不同/敬称略)

班区分	氏名	
A ええ～(A) (8名)	井出 訓*	明野 聖子
	千葉 芳広*	佐々木明員
	斎藤 隆史	尾西みほ子
	関川 彬	柳川 芳毅
B B.D (8名)	花渕 馨也*	雉子谷知子
	唯野 貢司	櫻井 潤
	福田 真二	田巻 玉器
	森 真理	田村 至
C Change! (9名)	及川 恒之*	久保 儀忠
	長田 真美*	小林 大祐
	豊下 祥史	齊藤 恵一
	長澤 敏行	佐藤 園美
	三國 久美	
D Development (9名)	齊藤 浩司*	會田 英紀
	東城 庸介*	小林美智代
	石川 秀也	坂野 悦子
	亀井 尚	寺崎 将
	松本真知子	
E いい(E) (9名)	国永 史朗*	植木 沢美
	土肥 聡明*	大島 伸宏
	大槻 美佳	澤田 教彰
	谷村 明彦	福良 薫
	中野 倫仁	

*タスクフォース

グループの役割分担

役割は各WSで順に変える

リーダー: WS作業の進行をリード

ゴールを把握

進行スケジュールをデザイン

きめられた時間までに作業が終了するようにリード

記録係1: 作業進行に出てきた内容をメモし、作業に役立てる

記録係2: WSのプロダクトとなる発表内容を討論により修正された内容もいれて記録し、FDの報告書資料とする。(最終的には、ワープロで作成し、グループで一本化して、グループ代表から下記へ提出)

発表者: 各WSでのプロダクトを発表する。

発表資料作成: グループ員が協力して作成 OHPシートで発表する

(パワーポイントでの発表は、特定の人物へ作業が集中するため)

Aグループ 「ええ～」

WS 1 低学力を実感する具体的場面

低学力を実感する具体的場面から学力と関連する項目を挙げた結果、「学力は」以下のように整理された。

- 1) 読み書きする能力
- 2) 計算する能力
- 3) 学習に対する態度・意欲
- 4) コミュニケーション能力

WS 2 低学力の要因と背景

学力・低学力の定義と要因：「初年時教育における態度・動機、モチベーション」

Aグループに与えられたWS - 2のテーマは、「初年時教育における態度・動機、モチベーション」の要因についてであった。

このテーマに関して、1. なぜ、そうなるのか、2. なぜ、問題となるか（しなければならぬか）に焦点を当て、KJ法により要因を抽出し議論した。

1. なぜ、モチベーションが低くなるか

1) 入学目的の不明確さ

不本意入学や志望理由が明確でない、職業に興味を持っていない、学ぶ目的の欠落、入学して学んだことと就職が一致しない。

2) 学歴偏重

大学進学が偏差値で括られている、高校生の段階では職業に対する意識を持ちにくい。

3) 社会的コミュニケーションの未熟

ゲームや携帯電話の普及で他人との関わりが少ないため、コミュニケーション能力が下がっている。

4) 生活習慣及び意識の未自立

生活リズムが未確立により、朝起きられず欠席が多くなる。

大学生が大人として扱われない。

家庭環境が影響している。ex) 様々なことに恵まれすぎている。逆に、苦しい。

5) 授業が面白くない

講義内容に対して学ぶ理由がわからない、つまらない等でモチベーションが下がる。

2. なぜ、モチベーションが低いことが問題となるか

1) 自主的学習が困難

目的がなければ学習意欲が出ない、自発的に勉強しなくなる、試験直前にならないと勉強しない。入学後も成長しない。

- 2) 大学水準を満たさない
問題解決能力が困難，授業内容を理解できない，学習が積み重ならない。
医療人としての人間力の形成に影響する。
- 3) 専門職・国家試験・職業適性に欠く
専門職の資格取得ができない，就労できない。職業選択において，学歴が関係する。
患者や医療チームのメンバーとコミュニケーションが取れず，臨床能力が向上しない。
- 4) 他学生への支障
他学生の学習の妨げになる，授業が進行できなくなる。
- 5) 教員との関係不成立
教員と学生との信頼関係が築きにくい，友人や教員との関わりが少なくなる。

WS 3 改善方策（問題解決方策）：改善の目標設定

本 WS では，WS2 であげられた問題点に対する改善方策を議論し，問題改善のためのプログラム名を決定し，その作業目標および学習目標を設定した。

プログラム名：「モチベーション向上プログラム」

作業目標または学習目標：

- 1) 大学で学ぶための目標を明確化。
- 2) 基本的学習態度の習得。
- 3) 現場を体験し，体験を共有する。
- 4) 患者とのコミュニケーションを取ることができる。
- 5) 自主的，集団的学習法を身につける。

以上のように，学生の学習に対するモチベーションの向上を目的とした「モチベーション向上プログラム」の作業目標および学習目標を決定した。各項目の具体的方策については次の WS4 で話し合われることになった。

授業題目「モチベーション向上プログラム」

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目的と全体の流れを把握する。	モチベーション向上委員会 (各学部から委員を選出)
2・3	学ぶ目的	学ぶ目的を各自明確にする。(SGD)	タスクフォース
4	基本的学習態度	マナーを学ぶ。(レクチャー)	教員 (ソーシャルケースワーカー)

5	基本的楽手態度	学習への基本的姿勢を学ぶ。(SGD)	タスクフォース、学生
6	現場体験	事前学習① (レクチャー)	教員、現場スタッフ
7	現場体験	事前学習② 何を体験するかを考える。 (レクチャー)	教員、学生
8	現場体験	体験(見学) (1人1ヶ所)	現場スタッフ
9	現場体験	体験(見学)	現場スタッフ
10	現場体験	体験発表の準備	教員、学生
11	患者とのコミュニケーション	基本的なコミュニケーション法を学ぶ。 (レクチャー)	教員
12	患者とのコミュニケーション	患者とのコミュニケーション法を学ぶ。 (ロールプレイ)	学生、SP
13	患者とのコミュニケーション	患者とのコミュニケーション法を学ぶ。 (患者との交流)	学生、患者
14・15	まとめ	体験発表およびレポート作成	タスクフォース・学生

Bグループ 「B. D」

WS 2 低学力の要因と背景

●近年、多くの学生にみられる大学で学習するための基礎的な学習スキルの欠如には、次のような要因と背景が考えられる。

1. 学習習慣・システム

- ・学習経験が乏しい。
- ・読書経験が少ない。
- ・電卓をすぐ使う。
- ・テレビばかり見ている。
- ・ゲームばかりしている。

2. 社会的側面

- ・メディア等の発達によって便利になり過ぎている。
(テレビ、パソコン、電卓等)
- ・ゆとり教育の導入による弊害
- ・小、中、高の教育の質の低下
- ・大学に入学しやすい受験環境 (18歳人口の減少による
大学全入学時代の到来)
- ・受験勉強の機会がない場合もある。(例：AO入試、推薦入試)

3. コミュニケーション

- ・少子化によるコミュニケーションの機会の減少
- ・議論の機会の減少
- ・文章を書く機会の減少 (例：手紙や葉書を書かなくなった。)

4. その他

- ・家庭教育が不十分である。
- ・大学に入った自覚がない。
- ・学習目標が不明確 (例：資格を得た後の将来像がもてない。
やりたいことが見つからない。)

WS 3 改善方策 (問題解決方策) : 改善の目標設定

授業の種類 :

導入教育 (1年生前期)

授業題目：

医療大式国家試験に合格できるノートの取り方

一般目標：

国家試験合格への第一歩として、基礎的学習スキルを向上させるために必要なノートのまとめ方を身につける

行動目標：

- ① 講義の内容を把握できる。
口述あるいは映像で呈示された内容を見聞きしながら、適切なメモをとることができる。
- ② 講義の内容を整理できる。
書き取ったメモを内容の重要度に応じて明快に順序よく整理できる。
- ③ 講義の内容の要旨を説明できる。
整理した内容を他者にわかりやすくプレゼンテーションできる。

WS 4 具体的改善方策

授業題目 医療大式国家試験に合格するノートのとり方

学習内容

1年前期必修 2コマ続き

回	テーマ	授業内容および学習課題
1	オリエンテーション	講義の内容や目標を把握する。
2	トライアル	“まずはノートをとってみよう”
3	情報の内容を把握して記述①	口述した内容をメモする。
4	情報の内容を把握して記述②	映像の内容をメモする。
5	情報の内容を把握して記述③	映像および口述の内容をメモする。
6	まとめの講義（第3～5回）	第3～5回の内容を復習し、ミニテストを実施。 添削した結果を後日フィードバックする。
7	情報の内容をまとめて整理①	口述した内容をまとめて記録する。
8	情報の内容をまとめて整理②	映像の内容をまとめて記録する。
9	情報の内容をまとめて整理③	映像および口述の内容をまとめて記録する。
10	まとめの講義（第7～9回）	第7～9回の内容を復習し、ミニテストを実施。 添削した結果を後日フィードバックする。
11	講義をノートにまとめる①	ノートに記録する。
12	講義をノートにまとめる②	グループで議論
13	講義をノートにまとめる③	発表会 ※第11～13回の内容に関するミニテストを実施
14	テスト	未定

評価： 出席 10%，テスト 60%，チェック（ミニテスト）10%×3回=30%

◎WS 4 の時間内では大まかな枠組みしか作れなかったため、WS 5 では以下の点を中心に検討した

【WS 4 の発表後に検討した事項】

1. 第2回「トライアル」の内容・方法について
2. 第3～5回、第7～9回、第11～13回の授業内容・方法について
3. 第6回・第7回の「まとめの講義」の内容・方法について、ミニテストの実施・内容・評価方法について
4. 第11～13回のテーマに関するミニテストの実施・内容・評価方法について
5. 第14回「テスト」の内容・評価方法について
6. 評価基準の見直し

WS 5 本FDで提案された方策の本学での実現の体制と方策

授業題目 医療大式国家試験に合格するノートのとり方

学習内容

1年前期必修 2コマ続き

担当者 学生40人に1人の教員

回	テーマ	授業内容および学習課題	備考
1	オリエンテーション	授業目標・内容を把握する。	
2	トライアル	“まずはノートをとってみよう” 教材：NHK教育番組ビデオ（一般向けテレビ番組）	教員が学生の現状を把握する。
3	情報の内容を把握して記述①	口述した内容をメモする。その後グループで、足りない情報を収集する。 教材：FMラジオ番組 メディカルコロンブス	グループワークは7～8人で行う。
4	情報の内容を把握して記述②	DVDの映像の内容をメモする。その後グループで、足りない情報を収集する。 教材：ドラマDVD	グループワークは7～8人で行う。
5	情報の内容を把握して記述③	映像および口述の内容をメモする。その後グループで、足りない情報を収集する。 教材：ビデオ	グループワークは7～8人で行う。
6	まとめの講義（第3～5回）	それぞれの教材の要点と、メモのポイントについて理解する。	
7	情報の内容を把握して整理①	口述した内容をまとめて記録する。その後グループで、足りない情報を	グループワークは7～8人で行う。

		収集する。 教材：FMラジオ番組 メディカル コロンブス	
8	情報の内容を把握して整理②	DVDの映像の内容をまとめて記録する。その後グループで、足りない情報を収集する。 教材：ドラマDVD	グループワークは 7～8人で行う。
9	情報の内容を把握して整理③	映像および口述の内容をまとめて記録する。その後グループで、足りない情報を収集する。 教材：ビデオ	グループワークは 7～8人で行う。
10	まとめの講義（第7～9回）	それぞれの教材の要点をまとめてノートへの記載するポイントについて理解する。	
11	講義をノートにまとめる	20分間程度の模擬講義を行い、ノートに記録する。	
12	第11回の講義を踏まえて作成したノートについて意見交換	グループワークで、わかりやすいノートのとり方について討論し、ノートを完成する。	
13	グループ発表会	完成したわかりやすいノートをグループごとに発表し、全体で討論する。	
14	テスト	口述+映像の教材を使い、ノートにまとめる。 教材：DVD	

評価 テスト100%、ただし、一回欠席するとテストの結果から5点ずつ減点する。

・板書がとりやすい
 ・パワーポイントの資料がはりやすい
 ・グラフが書きやすい
 Xモスハース

方眼紙

視覚教材や
 教員の説明の
 Xモスキナビ

まとめや
 参照スハース

ページ数

日付・講義名・担当教員などの記入スハース



北海道医療大学式
 国家試験にうがる1-1の一列

Cグループ 「Change！」

テーマ：学力判定の基準の明確化

プログラム名：学力判定の規準統一プログラム

WS 2 要因と背景

この WS2 では、テーマの背景要因について検討した。学力判定の基準の明確化が必要とされる理由は、評価基準（規準）が教員間で異なっている可能性がある、または評価基準そのものが教員間のみならず学生に対しても可視化・共有化されていない現状があるからである。

また、評価基準を明確にし、教員・学生間で共有する前の問題として、教育目標そのものの妥当性についても考える必要がある。さらにどのような評価方法を選択するか、どのような評価方法が妥当なのかといった点についても検討する必要がある。また、学力判定基準を明確にすることのみならず、それを遵守し継続していくためのシステムの構築も求められている。

一方、学生側の問題として、既有知識が多様化していることや、学生自身が学力を自己評価できない現状が挙げられた。しかし、学生にできるだけ具体的な自己評価のためのチェックリストを提示することで、学生自身も自分の学力を判定できるようになるのではないかという意見が出された。

WS 3 改善方策(問題解決方策)：改善の目標設定

一般目標

評価を明確化するために、基準・規準を統一する。

行動目標

- 1) 教育目標を定める。
- 2) 評価基準・規準を可視化し、共有化する。
- 3) 妥当な評価方法を選択し、共有化する。

私達のグループでは、学力判定の基準を統一するには、到達目標や内容を示す“規準”と目標に対してどの程度到達できたか判断する目安である“基準”の両方を統一する必要があると考え、一般目標を定めた。

行動目標として、評価を明確化するためには、まず、目標を明確にする必要があると考えた。その上で、評価基準・規準を可視化し共有化することが各教員の意識を変えるのではないかという意見が出た。さらに、共有化した評価基準・規準を元に、各教員が新たに基準・規準を作る際の参考になるだけでなく、評価方法等の改善に利用できるシステムを作ることが有益であると話合った。

WS 4 具体的改善方策

このWS4では、プログラムの達成のための3つの行動目標毎に具体的方策を設計した。

行動目標 1) 教育目標を決める

シラバス作成時に、各教員が、教育理念と教育目標と各科目の目標の一貫性を検討する。また、時代の社会的なニーズや要請に即応しているか吟味する。

行動目標 2) 評価基準・規準を可視化して共有化する

大学教育開発センターの教育プログラム開発部が中心となって、評価内容をWEB上で公開し、教員がいつでも確認できるようにする。また、各教員は学期の終了時に担当科目の評価内容（試験問題やレポート、採点方法などの評価規準、学生の得点分布など評価の結果など）を教育プログラム開発部に提出する。

行動目標 3) 妥当な評価方法を選択し、共有化する

妥当性の評価は、学生、教員、FD委員、外部機関といった多側面から実施する。まず学生による妥当性の評価は、従来の講義終了時のFDアンケートを活用する。また、教員自身による評価も従来の方法で自己評価する。

今回、新たな方策として考えられたことは、同僚間の評価である。具体的には年1回程度、評価方法が妥当であったか検討するためのワークショップを開催する。各学部や学科から数人の教員が、検討の素材となる科目とその評価方法を提示する。なお、検討素材となった科目担当の教員には教員評価時にポイントが与えられ、不利がないよう配慮する。

WS 5 本FDで提案された方策の本学での実現の体制と方策

行動目標 2) 評価基準・規準を可視化し、共有化する

WEBを用いた評価方法の開示

- ・ 具体的には、試験内容及び点数配分、レポート内容及び点数配分などの評価に関わる資料を全て開示し、他の教員も閲覧できるWEBを用いたシステムを作成する。単位認定者の割合や平均点なども開示し、評価基準などを可視化する。
- ・ 大学教育開発センターの教育プログラム開発部により実施し、学期終了時に各担当教員が各資料を提出する。
- ・ 評価方法、評価基準を公表することにより、他の教員に対するノウハウの提供となるため、開示により教員評価のポイントを加算する。
- ・ 新たに担当となった教員にとっても、これまでの試験方式、評価方法などを理解することができるため有用である。
- ・ またコメント欄を設け、講義又は評価をする上で苦慮した例などの情報も提示し、低学力などへの対策につながると考える。

行動目標 3) 妥当な評価方法の選択の共有化

評価方法に関するWSの開催

- ②で得られた情報や教員自己評価、学生評価などを基に、大学教育開発センターの教育プログラム開発部により評価方法に関する WS を開催する。
- WS参加者は、教科担当者、開発センター教員、同僚教員、外部教員（他学部、他大学など）とする。
- WS開催時期は、教科毎に数年に1回を予定。
- WSの開催により、教員の負担は増す。そのため WS 参加し、報告書を提出することで、教員評価のポイントを加算する。また WS により、評価方法に高評価を得た場合、又は改善が認められた場合は教員評価のポイントを加算する。

Dグループ 「Development」

WS 2 要因と背景

1、なぜそういった学生が増えてきたかについて

入学前の問題として、親の意見や学力不足による不本意入学、義務教育や高校教育の質の低下および、家庭の核家族化による機能不全、18歳人口の減少による入学競争の緩和、入試の多様化による不十分な基礎学力など近年に特徴的な社会的変化が要因としてあげられる。また、入学直後の問題として、成績評価と管理システムの不備、および教員の人材不足、受け身の授業形態や、マス教育による弊害などの日本の大学システムの問題。および、二十年三十年前と比べた学生自身の社会的な未熟さなどが考えられる。

2、低学力学生の早期発見と追跡を行うための改善方法、および改善の目標設定

1) 低学力学生の発見方法の原案

各学生の高校および大学入学後の成績、出席情報、などの情報をコンピューターなどでシステム化し、各教員間で共有をはかり、早期発見に役立てる。

2) 対応、対策、追跡について

学生とのコミュニケーションを充実させるために、少人数担任制にする。さらに問題がある学生を学力と生活の面からバックアップするために“低学力学生レベルアップ支援プログラム”および学生の生活一般と交遊関係をモニターおよび必要なら介入を行うために“生活習慣・環境改善プログラム”を立ち上げる。さらにこれらメイクアッププログラム（補正教育プログラム）の実質化と自己評価ができるシステムを構築する。

WS 3 改善方策(問題解決方策)：改善の目標設定

WS 4 具体的改善方策

“低学力学生の早期発見と追跡”にむけて具体的改善方策

「学生学力レベルアッププログラム」の現実化に向けての提案

1、学生と教員、情報処理や事務などの専任スタッフによる学生バックアップセンターの立ち上げ

データ管理、カウンセラー、および就職担当などの専任スタッフと教員が参加する。センターでは入学直後から卒業まで継続的に生活習慣アンケートと学力テストなどの結果の情報を集め、管理する。

2、アンケートと学力判定試験による学生の早期の懸案学生の発見

入学当時に入学動機や基礎学力試験、さらにアンケートによる学生の生活の把握と学部ごと科目ごとの定期的な試験のデータにより、学生の状態の把握追跡をおこない、低学力学生の早期発見を行う。データ管理は「学生バックアップセンター」に一任する。

3、教員による学生の心理面のケアとサポート

- 1) 少人数ごとの担任性により、学生の生活面と学力面のサポートを行う。
- 2) カリキュラムに応じた小テストを行い、担任と学生とが到達目標と期間を設定するなどして学生の状態の把握と、学生自身の自己状態把握が容易に行える環境を作る。

WS5 本FDで提案された方策の本学での実現の体制と方策

“低学力学生の早期発見と追跡”にむけて北海道医療大学での「学生学力レベルアッププログラム」の実現への取り組み

1、学生バックアップセンターを設置し、当プログラムの中心的な役割を担う（2011年4月開設予定）

理事長、副理事長、学長、学部長、センター長

データ管理課 5名

生活支援課（カウンセラー）2名

就職試験課 5名

学生代表 副学長 SCP

クラス委員

教員 学科ごとの担任、各学年に二人

プログラム内容

- 1) 入学時の基礎学力—人間基礎科学講座による国語、英語、数学および化学の「基礎学力テスト」の実施。これにより学生の学力の把握と対象学生のグループ分けを行う。
- 2) 低成績学生グループに対するメイクアップ教育（補正教育）を行う。大学の授業が理解できる基礎学力を目指すため、状況に応じてテストの業者への委託も検討する。
- 3) 授業開始後は定期試験や中間試験など、科目担当教員による現カリキュラムよりも多い定期的な試験を行う。これらテストのデータや履歴の管理はセンターの情報システム担当が一括する。採点基準、合格基準の統一化をはかり、より正確な学生の学習能力把握を心がける。
- 4) 少人数担任制による、科目担当教員による低学力学生に対する個人指導を行い、必要に応じて、問題や課題を抱える学生はセンターの担当カウンセラーによるケアを受けることを義務づける。
- 5) 学力だけではなく、アンケートを用い、学生の生活状況の把握を行う。生活習慣、対人関係の問題が発見された時は、必要に応じて担任がカウンセリングを行うように誘導する。
- 6) 担当教員は研修を受け、あらゆる学生に対する適切な指導態度を身につける。

Eグループ 「いい(E)」

平成 21 年度北海道医療大学 FD 研修 E グループ報告書

学生の低学力化に対する効果的教育方法 ーセーフティネットプロジェクトの提案ー

グループメンバー： 国永史朗*、土肥聡明*、大槻美佳、谷村明彦、
中野倫仁、植木沢美、大島伸宏、澤田教彰、福良薫

*タスクフォース

はじめに

本年度の研修のテーマは、表記の通り「学生の低学力化に対する効果的教育方法」であり、さらに具体的で実行可能な教育方法を思案することにあつた。ワークショップ1では、5つのグループが日々感じている低学力化の現象を洗い出した。そこには共通した内容が多く含まれ、大きく5つに大別された。すなわち、「基礎知識の不足」、「学習スキルの低下」、さらに入学動機を含む「モチベーションの低下」、そしてこうしたモチベーションの低い「学力・意欲に問題のある学生の発見と指導の困難さ」、こうした学生達を判定するための「学力判定の基準化・明確化の問題」である。

我々Eグループは、このうち「基礎知識の不足」に焦点を当てて、どのような具体的方策で基礎学力を向上させうるのか検討した。これらの検討にあたっては、当然のことながら学習スキルの問題やモチベーションの問題が背景にあり、さらにはどのようにそれらの学生をスクリーニングしながら基礎学力を向上させるのかといった意見交換があり、他のテーマとも関連しながらの検討となった。

以下にその検討の過程と検討の結果提案する「セーフティネットプロジェクト」の概要について報告する。

1. 低学力の要因と背景

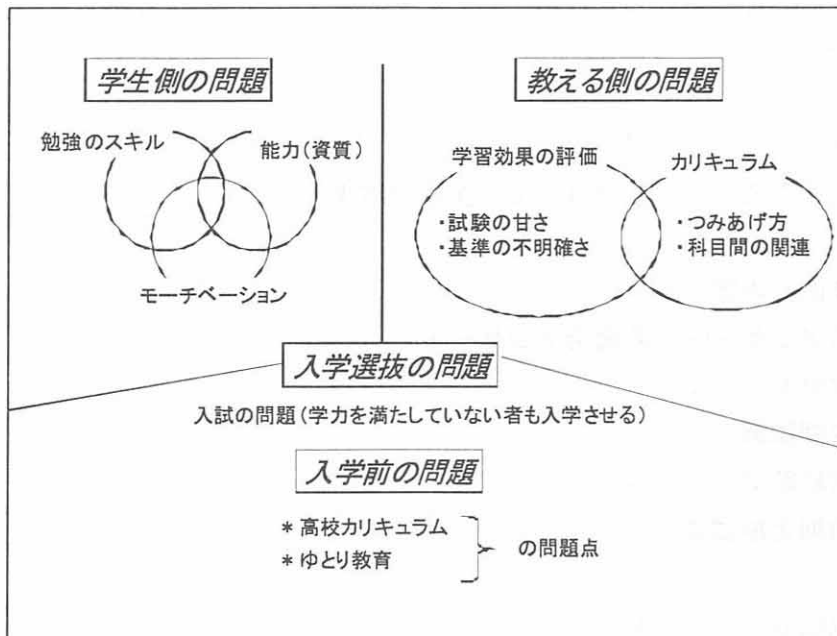
まず低学力の要因と背景について検討した。検討方法は KJ 法による低学力の要因分析である。その結果、大きく3つのカテゴリーが抽出された。

カテゴリー1【学生側の問題】では、さらに3つのサブカテゴリーに分類された。「ノートの取り方がわからない」、「文献の探し方がわからない」など〈勉強スキルの問題〉、「一般常識がない」、「生活体験が少ない」などの〈能力（資質）の低下〉、「希望の進路ではない学部（学科）に入学した」、「将来の方向が定まらない」など〈モチベーションの低下〉の3つである。検討の過程でこれら3つの問題は単独で存在するのではなく、重なり合いながら学生の学力低下を引き起こしていることが話し合われた。

カテゴリー2【教える側の問題】では、さらに2つのサブカテゴリーに分類された。「各科目の構成の関連させ方の問題」、「基礎学力を積み上げる形にならない授業配分（特に基礎と専門）」など〈カリキュラムの問題〉、「留年をさせないための甘い試験内容」、「合否判定の基準の不明確さ」など〈学習効果の評価の問題〉といった2つのカテゴリーである。特に2つ目の問題では各教員がどのように判定をしているのかかなり不明瞭な現状があるのではないかという点が話し合われた。

カテゴリー3【大学に入る以前の問題】が検討された。まずそもそも高校教育やそれ以前の教育内容やゆとり教育の影響による低学力化といった〈入学前教育の問題〉、さらには A0 入試により試験勉強をしてこなかった学生の存在や定員を満たすために低い学力の者を入学させざるを得ない現状など〈入学選抜の問題〉がある。

以上の検討内容を図示したものが「図：低学力の要因と背景」である。



図：低学力の要因と背景

2. 改善方策：目標設定

1. の検討でも明らかなように、学生側の問題として主に学習スキルや資質といった「学力面」と主にモチベーションを中心とした「精神面」に関する問題がある。こうした学生を救済するためにはきめ細かに学生の状況を把握し、その学力が不足していれば補講など補っていく必要がある。さらに「精神面」による問題のために学習に気持ちが向かないとすれば、そのままの心理状況で本学の学業を続けるのかどうかも含めてフォローしていく必要があると考えた。

そのためには何段階かのネットを設けて落ちて落ちて救いあげフォローしていくきめ細かいシステムの必要性が議論された。そこで、提案されたこのプロジェクトの目標と名称および骨子を以下に示す。

目標 最終的に学生を救えるシステムの構築

名称 「セーフティーネット プロジェクト」

- 骨子
- ・ 試験前後の成績、心境、生活環境などの変化を把握して学生の学力向上につながる対応策を講じる。
 - ・ 最後には学生を救えるシステムの構築を目標としているが、留年者を救うためのシステムではなく、留年しないように、さらに留年した後の学力向上を目指すものである。
 - ・ 医療関係の専門職を育成する大学であるが、本人の希望、心境の変化等により進路変更を希望するような状況、心境を早期に把握する。

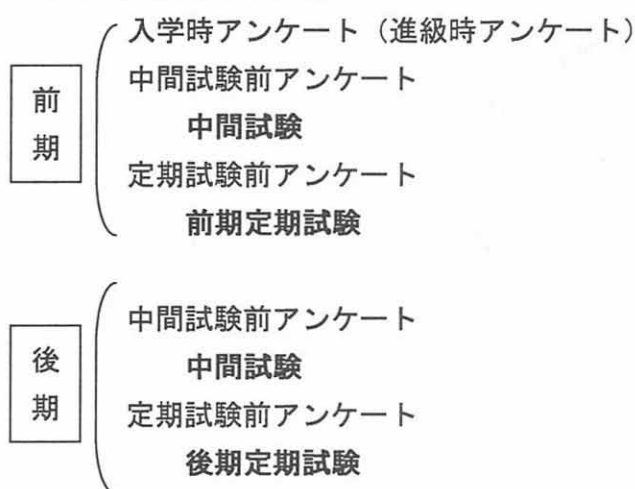
このことにより、学生の進路変更についての的確な対応、対処を可能にする。

3. 「セーフティネットプロジェクト」の具体的改善方策について

続いて「セーフティネットプロジェクト」の概要について述べる。このプロジェクトは基礎的学力を身につけさせること主旨としているため、1～2年生、あるいは6年教育の学部では3年生までの学年に焦点を当てることとした。

入学時～2，3年生までの期間、学部・学科全体で、学生の心情および学力を把握し、学生が授業についていけなくなる前に担任教員による面談や補講等でサポートする。

プログラムの具体的な内容



前期の概要

1. 入学時アンケートで学生の意識、学習スタイル、得意・不得意科目等を把握し、指導の参考に
する。
2. 中間試験前アンケートで、大学生活および講義が始まってからの心情の変化を把握する。実際
に試験を受けて悪い点数で苦手意識をもつ前のこの時期に一度アンケートを取るのが狙い。不
安などで対応が必要な学生をケアする。
3. 中間定期試験で学力を把握する。
4. 定期試験前アンケートで、学生の心情の変化を把握し、定期試験に向け中間試験成績の低かつ
た学生を中心に学習法などを指導する。

後期の概要

5. 前期試験不合格者を中心に、再試験や後期授業の理解などを確認・指導する。
6. 中間定期試験で、後期の内容に関する学力を把握する。
7. 後期定期試験前アンケートで、学生の心情の変化や学習スタイル把握し、進級に問題がありそ
うな学生をケアする。
8. 進級できなかった学生に対しては、特別プログラムあるいは進路変更を含めてた指導を行う。

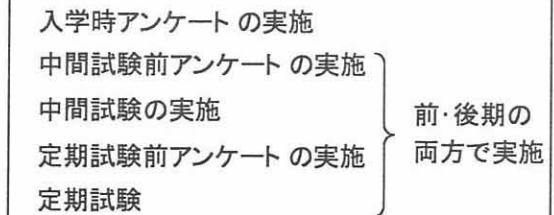
なお、学生の指導を行う担任教員は、1人に10～15人の学生を割り当てる。実際に指導が必要な学生はその数分の1と考えられるので、比較的手厚いケアが可能である。

4. 「セーフティネットプロジェクト」の進め方

最後に我々が提案した学生の救済の意味を込めた「セーフティネットプロジェクト」の具体的な進め方を述べる。3. で概説したのは図1に示すような計画である。この計画では中間試験を実施し、入学時、中間試験前、定期試験前と年間で5回のアンケート調査を学生に実施する。この計画に至った経緯は2. の報告をご覧ください。

ここでは図1の計画を実施するにあたり、実施するアンケートの内容・項目について議論がなされたので、その詳細を報告する。

図1; WS4で提案した計画



学生へのアンケート調査を行うにあたり、最初に論点となったのは「アンケート内容をどのようにするのか」であった。アンケートに回答する初年度の学生は自己表現が未熟であるということも考慮し、学生への聞き方（教員側が学生から確実に情報を引き出せる）の工夫が必要であるという意見があった。学生生活で直面する大きな問題点は主に「学力面」と「精神面」に関する事項であるということが予想される。学力面における問題とは大学の講義や実習における理解度を、精神面における問題とは大学でやりたいことや、将来の職種に対しての意識、モチベーションに関係することである。ゆえに、アンケートは学生の学力面と精神面の両方を教員が把握し、アンケートの結果に基づき、学生へ適切にフィードバックされる内容とすべく議論が進められた。また、先に述べた「学力面」および「精神面」のサポートはこのプロジェクトの骨子であり、以下に詳述する項目において、この2つを基本として議論がなされている。

① 入学時アンケート（図2）

ここでは、大学入学前にどれくらいの学習をしてきているか、大学に入学した時点での意識の高さなどを調査する狙いがある。学習に関しては、例えば高校での科目の履修状況、好きな科目や嫌いな科目、得意な科目や不得意な科目である。科目の好き嫌いや得意不得意は「どうして」と理由を記述させることで、学生の状態をより深く把握出来るのではないかと考えた。学習面においては科目に関することのみならず、学習習慣についても問うこととした。例え

図2; 入学時アンケート

1. 高校で履修した科目は何ですか？
2. 高校時代によく勉強した方ですか？

全くしない	よくした

 また、なぜそう思いますか？
3. 勉強のタイプはどちらだと思えますか？

コツコツ型	短期集中型

4. 高校の科目で
 好きな科目とその理由
 嫌いな科目とその理由
5. この学部を選んだ理由は何ですか？
 親のすすめ 先生のすすめ

 その他（理由: ）
6. 自分が希望する職種について体験する機会がありましたか？
 ない
 ある（ ）
7. 大学生活について不安はありますか？
8. 大学でしたい事、学びたい事は何ですか？

ばどれくらいの時間勉強したか、机に向かう習慣がどれくらい定着しているか、学生自身は勉強するにあたり、自分をどのようなタイプ（真面目または要領が良いなど）と認識しているかなどである。次に意識に関してであるが、入学時の学部の選択にはなんらかの理由が存在すると考えられる。そこで、学部選択の理由、どういう気持ちで入学したのかを問うこととした。また、漠然とではあるがこれからの大学生活において不安なこと（例えば勉強、定期試験・進級、国家試験など）を自由に記述してもらうことによって、学生を精神面からもフォローできる情報を収集することにした。

② 中間試験前アンケート（図3）

まず、中間試験を実施する必要性を述べる。初年度の学生は中間試験を受けることで、大学の試験がどのようなものなのか、高校までに受けてきた試験との違いを知る機会となる。中間試験の成績から学生の理解度等を早期に把握し、素早い対応・フォローが可能になると考えられる。

中間試験前アンケートの実施時期であるが、これは「試験実施前」にアンケート調査を行うことが重要である。試験後にアンケートを行ってみてはどうか、という案も出されたが、その場合には学生自身が試験の成績から科目に対しての苦手意識を有してしまうことが有り、正しいアンケート結果が得られない可能性が出てくる。すなわち、試験を行うことで学生の回答にバイアスが生じてしまうのを防ぐためにも、試験実施前にアンケートを行わなければならないという結果になった。中間試験は半期中頃（5月末から6月頃）に学部の都合に合わせて実施することとし、アンケートは試験1ヶ月から2週間前頃までに実施することとした。

中間試験前アンケートは大学入学後からの学生の変化をみるのが目的である。すなわち、大学での生活や講義を受けて、どのように感じているかである。アンケート項目は入学時と変わらない部分が多いが、講義を受けてみて、好きな・嫌いな科目、得意・不得意科目、入学時と比べて職種に対するイメージの変化があったかどうかを問うこととした。

図3: 中間試験前アンケート

1. 講義を受けてみて

好きになった科目 ()

嫌いな科目 ()

得意な科目 ()

不得意な科目 ()

2. 入学時に思った職務内容のイメージに何か変化はありましたか？

③ アンケート結果のフィードバック

このようにして、アンケートの実施時期・項目が決められた。最後にこれらの結果に基づいて、学生へどのようにフィードバックするのが議論された。

現在と同様にクラス担任制とする意見がだされた。担任制において、問題となるのは1人の教員に割り当てられる学生の人数である。各学部の定員等を考慮して1人の教員につき10から15名程度とすることで議論がまとまった。10から15名の担任は多いように思われるが、実際に成績不振等で問題となる学生は、この中の数人（2から3名程度）と予想されるので充分対応可能な人数であると考えられる。また、教員は自分が講義を担当する学年の学生を担当として受け持つことが望ましい。担任の教員が学生をフォローする際に、自分の講義担当学年の学生を担当として受

け持つならば、その学年における科目間の情報（履修する科目名、科目数、内容などの連携）を整理しやすく学生へより良いサポートを行えるメリットがあると考えられる。しかし、担任の教員は、学生の成績状況を自分が担当する科目以外は把握しにくい。そのため、同一学年の講義を担当する教員内での情報をより細かく共有する事が必要である。また、学生の成績の一元管理役として、各学年に学年主任等をおく事が提案された。

担任として学生を受け持つ期間であるが、本学には4年生の学部と6年生の学部が混在する。学生の状況などをしっかりと把握するため、6年生の学部では2年ごと、4年生の学部では1もしくは2年ごとの担任とすることで議論がなされた。

おわりに

今回の研修を終えて、それぞれが多くのことを学ぶことができた実感している。それは、自分の所属する学部・学科だけの問題ではなく大学全体が抱える共通した問題であることが検討を重ねる毎に明らかになったからである。また、そういった学生への対応もまちまちであり、事なかれ主義で自分の担当科目で留年者を出したくない教員が存在し、その事が逆に卒業時に学生を苦しめていることも事実であることが話し合いの中で浮き彫りになった。学生の低学力化といった学生側の問題を話し合いながら実は大学側、各教員側にも改善すべき点が多くあることを検討の過程を通しながら心に刻んでいったように思う。

FD研修の目標は「実現可能な具体策の提案」であったが、どのような具体策を立てたにせよ、そこにはあらたな取り組みに向かう教員のエネルギーが必須である。学生の教育へのエネルギーを出し惜しみしてはどんなにすばらしい具体策が提案されたとしても実現は不可能であろう。今回の研修では短い時間であったが、濃厚な検討が十分にでき教育に対する医療大の教員の熱意を感じる2日間であった。

参加者感想

薬学部 関川 彬 (Aグループ)

「学生の低学力化に対する効果的教育方法」をテーマに2日間のFD研修に参加した。薬学部が出来て以来十数年に渡り偏差値が付かなかった時代を経験している自分にとっては昨今の偏差値の低下はさほど深刻なものには感じられないが、少子化による受験生の激減の問題や全国的な薬学部の定員割れの問題は避けて通ることはできない。研修に参加した教員がこのテーマに深刻さを感じていない方がむしろ大学にとって深刻な問題である。限られた時間内で問題点を挙げ、プロダクトを創り上げ、発表するといった研修は三人寄れば文殊の知恵の発想によるものである。しかし、深い分析に欠け、適切なプロダクトを生み出すことはできない。大学の生き残りの方策を得るためにはFD研修に留まらず、しっかりと組織内で議論し、実行してゆく必要がある。

薬学部 唯野貢司 (Bグループ)

FD研修(学生の低学力化に対する効果的教育方法)に参加し、グループBで検討した事項などについて総括し、感想をまとめた。

WS2「低学力の要因と背景」として挙げられた事項は、大きく4つに分類された。次いで、において問題解決方策として基本的なノートを取り方を取り上げることとなり、以下W4・W5において具体的なシラバス・ノート案(雛形)について検討した。

今回の研修を通して、低学力化というよりは社会環境など様々な要因の変化によって、口述や呈示された映像を見ながら内容の要点をメモに取り、ノートにまとめるといった能力に欠けている学生が、学部に関係なく多く存在することが浮き彫りとなった。

このことから、今回我々グループBがまとめた授業題目「医療大式国家試験に合格するノートのとり方」は、導入教育の一環として取り上げる価値があるものと思われる。

看護福祉学部 佐藤園美 (Cグループ)

今回のテーマである「学生の低学力化に対する効果的教育方法」は、現在国家試験の合格率向上という課題を抱える大学にとって、何をどう取り組んでいかなければならないかを、具体的に考えさせられる機会となりました。また、他学部の先生方の様々な意見や各学部の現状を聞くことができ、大変参考になりました。

グループのテーマである「学力判定の基準の明確化」については、学部内部でもほとんど統一されていない状況について知り、教員ごとの評価方法の違いに関する疑問を他学部の教員の方々も抱いていたことが分かりました。グループメンバー全員が真剣に取り組む有意義な時間を過ごすことができましたが、当グループの内容は他のグループと異なり評価に関わる部分であったため、どのようにWSを進めるか難しく、研修テーマである低学力化の対策については十分なディスカッションができませんでした。

私たちD班は、「低学力学生の早期発見と追跡」というテーマで、学生を支援するバックアップセンターの設立を考案した。WS 2では、何故低学力の学生が増加傾向を示しているのか討論をした。その結果、入学前後に渡る諸問題があつて今日の状態になっていると考えた。WS 3では、低学力学生の早期発見と追跡、対策を幾つか考案した。WS 4, 5では学生の学力を向上させるためのバックアップセンターの具体化について討論し、6年間の支援スケジュールを組んだ。

9名の統一した意見としては、現状の本学の状況では十分な学生支援をできておらず、新規の情報集結型組織が必要であるとの見解に至った。阿部FD委員長から、幾つかの大学で上記のような支援組織を設立したが、どこも失敗していると意見が出た。しかし、それらの大学では単に運営の仕方が悪いだけではないだろうか。優秀な専属スタッフで運営されるならば、学生にとって強力な組織になると考える。本FDは学生支援を模索実現するために大変有意義な研修となった。運営の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成21年8月6日から2日間にわたり、北海道医療大学サテライトキャンパスで開催された第8回北海道医療大学FD研修会に参加した。研修テーマは「学生の低学力化に対する効果的教育方法」であった。学力に関する定義あるいは低学力の要因などを列挙し、低学力の学生の早期発見ならびに追跡を行い、その原因を追及し、最終的に具体的な改善対策を提案するというプロセスに従い、各グループで討議しその具体策を発表するという内容であった。私が所属したDグループでは、低学力化の要因として、高校教育の低レベル化、家庭内における環境変化・崩壊あるいは大学入試窓口の広がりなどが挙げられた。また低学力学生の早期発見のため、レベルアップ支援を立ち上げそのプログラムの具体的な内容を討議した。唯、環境を整えることは大切ではあるが、学生自身が意欲的に学業に取り組むことが先決であるとの意見も、もっともなことと思われた。

個人的には、学力低下に注意を払うと同時に、本学学生の優れている点でもある、真面目さや人に対する優しさ、あるいは礼儀正しさをもっと評価すべきであると感じた。それらの素晴らしい素質を将来医療現場で生かすため、学生は基本となる学業に勤しみ、教員は学生の意欲をサポートし続けることが大切であるとの認識をもった。

ディレクター感想

F D委員長 阿部 和厚

今回のF D研修は、F Dの実質化を意識し、テーマが各学部学科の重要課題ということで、本学経験の長いベテランの教員の参加を多くとお願いしていましたが、大多数は初回参加でした。だが、成果は、使えるものがまとまりました。では、これを現実に活かすのは？ F D委員会と他の委員会や学部学科の実務に結びつけることが必要。まだ、まだ課題。

F D研修は、これまで1泊2日でしたが、抵抗もきこえ、サテライトキャンパス2日としました。1日目の夕方に情報交換会を入れ、話しはもりあがっていました。

今年の教育GPに応募の70国立大のうち、半数近くがワークショップのF Dを実施、うち3分の1ほどが合宿。F Dでは、教員の連携、共同体意識をつくることも大きな目的。合宿型を進めているところでは、F Dはやはり、同じ屋根の下で寝泊まりし、同じ釜の飯を食うでないとならんと本当のF Dにはならん、連携は生まれてこないとの感想もあります。

タスクフォース感想

大学教育開発センター 国永 史朗

“分数のできない大学生”という衝撃的な事実のもとで、大学生の学力低下が話題にのぼって久しい。今回のF D研修の内容は、その学力問題に焦点をあてたものであった。『低学力化に対する効果的教育法』というメインテーマで活発なWSが行われ、プロダクトがつけられた。研修中、学力について、また全学教育のあり方などについて、改めてあれこれと考えさせられた、そんな2日間であった。

学力とは何か。教育の分野でよく用いられる言葉だが、なかなか難しい概念である。現代教育評価事典（東洋ら、1988年）によると、「意図的なカリキュラムにそって、そのカリキュラムの目標の達成度や達成可能性を示す行動の基礎となるものとして想定される能力」とある。カリキュラムの要素となる目標には、「認知（知識）」・「情意（態度・習慣）」・「精神運動（技能）」の領域がある。したがって、学力とは、これらの領域の目標到達度などによって測られる能力ということになる。

現在、本学の全学教育をはじめ、さまざまな大学で初年次教育（導入教育）が実施されている。その授業内容を整理すると、「学生生活、社会生活をおくっていくうえでのスキル」と「学習を遂行していくうえでのスキル」とに大別される。そのうち文系・理系の大学ともに、最重要視している内容は前者の方である。これは入学してくる学生に対して、どちらかという情意領域の学力に問題があるということを示唆している。本学においても然りであると思う。しかしながら、情意領域は他の2つの領域とは異なり評価の難しいものである。情意的なものは、その性格からそれへの達成度を客観的にとらえることはなかなか難しい。この場合は、したがって到達目標を具体的に明示できないので、方向目標という表現をとることになる。

全学教育において、情意領域について方向目標をしっかりと身につけさせるためにはどのようにすればよいのか。教育の目標構造からすれば、到達目標から方向目標への道筋が原則であると思う。また、学力の構造においても、認知的な、また精神運動的な領域に中核を据えて、その獲得を通して情意的な領域の育成を図るのが正道であると思う。したがって、ここで重要なのは、教員は認知あるいは精神運動領域の教育展開において、同時に情意領域の方向目標を常に意識させる教育をしていかなければならないということである。そして、その点を教員全体で理解し、徹底させていくことが重要であると思う。そんなことを感じたF D研修であった。

FD研修からの発信

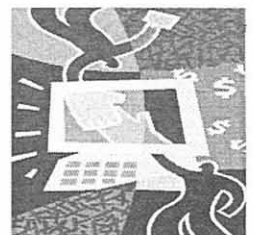
今回のFD研修では、大きな変更点が二つありました。一つは、宿泊を止めたということ。もう一つは、研修の成果を実現につなげることを掲げた点です。研修のやり方についてはさらに検討が必要でしょうが、今回の研修では、宿泊が無くても十分に成果を得ることは可能なことが明らかになったと思います。今回の反省を踏まえ、参加者が嫌々ではなく、喜んで参加したがる研修のやり方をさらに探っていく必要があるでしょう。

成果の実現に関しては、いくつか問題があるように思います。まず、何人かの参加者が言っておられたように、大学を動かす新たなプロジェクトを計画するには、責任をもって立案し実行する立場の人でなければ、やはり、とえあえずWSをまとめるためだけの目先の発案になりかねません。いつもと同様に、今回のFD研修の参加者もほとんどが初めての参加者や本学に新しく来られた先生が多く、大学の事情をよく把握されていない方も多かったと思います。今回のテーマである「低学力対策」は、国試に受かる学生を卒業させるという責務を負った本学にとっての重大かつ緊急な課題であり、各学部学科の細やかな事情や学生の動向に通じた、政策の責任をもった立場の方が真剣に取り組むべき問題でしょう。今回の研修内容と参加者がそれに見合った立場であったかどうかには疑問が残ります。FD研修が成果の実現を掲げるためには、今後の課題として、テーマに合わせて参加者を限定し、研修内容から実現へのプロセスを明確にしていく必要があるかと思えます。

平成21年度北海道医療大学FD研修は、同年度の6月に着任したばかりの私にとって、タスクフォースとして周りの教員の方々の議論や作業を導くというよりも、本学における教育の実情を勉強する一つの機会になった。とりわけ「学生の学力をめぐる現状分析」について各学部代表者の講義では、各学部の学生の学力をめぐる問題点のみでなく、それぞれの教育に対する考えかたを知ることができた。またワーキンググループの作業では、各教員より所属する学部における教育活動も拝聴することができた。

ただしスケジュール全体において、内容を詰め込みすぎている印象を受けた。また「WS5」で改善方策実現の体制と方策が議論されたが、多くの教員は、実現に当たっての全学的システムをイメージし難いようであった。

今後は、FD研修に参加するリピーターを増やすための工夫も必要であろう。しかし、1日目最後の情報交換会は、気軽に話しができる雰囲気が感じられた。



アンケート集計

平成21年度北海道医療大学FD研修参加者プレアンケート

氏名 _____ 連絡先 e-mail _____ FAX _____

1. あなたは、最近、本学の学生は低学力化していると考えますか。そうであれば、その根拠は何ですか。

2. 担当する授業をすすめるうえで、学力と関連して、どのような困難・問題を感じていますか。
担当学年 科目名

授業を進める上での困難

あなたは、その困難を解決するために、どのような工夫をしていますか。

このFDでは、第1日目の終わりに、「学力に焦点をあてた工夫された授業」としていくつかの授業を5分程度でご紹介いただく「授業紹介」の企画があります。これも考慮して、具体的にここにご紹介願います。

3. あなたは、学力に関連して、その他にどのような問題に気付いていますか。

どのような方策（授業その他の教育指導）が必要と考えますか。

4. FD研修の機会に、学力に関して、意見交換したい課題はありますか、あるいは知りたいことはありますか。

5. 学生の学力向上のために、普段から教員が示すべき、態度・習慣、指導はどんなものがありますか。

6. 学生の学力向上のために、大学としてどのような取り組みが必要と考えますか。

平成21年度北海道医療大学FD研修参加者プレアンケート

1. あなたは、最近、本学の学生は低学力化していると考えますか。そうであれば、その根拠は何ですか。

- 1) していると思います。実習等で基本的なことを聞いても答えられない学生が増えた。
- 2) 低学力化している。
 - ・学生実習での受け答え、研究室に来る学生の様子など。
 - ・考えていない。知っていることは答えられるが、そこから派生すると答えられない。
- 3) 考える。根拠：受講態度を見ると、授業について来られない学生が増えているように感じる。
- 4) 従来、試験を実施すると立派な答案がある一定数みられたが、最近は非常に稀である。成績分布が変化しているように感じる。
- 5) 学力が低下していると考え。歯学部6年生の臨床実習において過去10年間フッ素の項目を担当しているが、基本的な濃度計算ができない学生が多くなってきた。
- 6) Yes。根拠：そのような話を聞いたから。
- 7) 私は本学に赴任して6年目になりますが、この短い間でも学生の学力が下がってきていると感じます。具体的には、「読み・書き・そろばん」の能力に不安を感じる学生、80分間の授業で集中力を維持できない学生、ものを考えようとする姿勢に欠ける学生の増加などです。
- 8) 他大学と比較して、あるいは近年の学生と比較して常識と思うことがわからないと感じる。たとえば、単純なパーセントの計算などができないなど。
- 9) 看護学科に関しては、最近の傾向としての低学力はさほど感じていません。
- 10) 定期試験における落第者が増えている。文章（レポート等）を書けない学生が増えていると感じる。
- 11) 基本的な計算ができない学生が増えているように感じる。また、漢字で記載可能な文字をひらがなで記載したり、誤字が増えている印象を受ける。
- 12) ・レポートが書けない（文章力、漢字が書けない、読めない）
 - ・文章を読んで、あるいは話を聞いて内容を理解できない（読解力、理解力）
 - ・ある物事から考えを膨らませたり、想像したりすることができない（思考力、想像力、理解力）
 - ・かけ算、割り算などの計算力が低下している。
- 13) 話をしているこちらの意図する内容を学生が理解できない場面が多く見受けられます。教本に記載されている漢字がよめない、試験問題の意図や解答および解説が理解できない場面が見受けられ更に解説を理解するための説明が必要と思われます。
- 14) 日本語の基礎学力の点で低学力を感じることもある。教科書などのいろいろな記述文を読ませたときに専門的な用語の場合は仕方がないが、それ以外の言葉、漢字などを正しく読めない学生がいる。
- 15) そう思う。文章を書かせると稚拙で中身の少ないものが増えている。
- 16) はい。試験成績の慢性的低下傾向。
- 17) 約2割の学生は学力が低い。そのうちの半数は、ゆとり教育のせい、努力が足りなく勉強のくせがついていない。しかし、この半数は、勉強の習慣をつけるクセをつければ（小テストなど）何とか持ち上げられる。この引き上げは誰がやっても困難。入試で全入に近い状態では、このことは十分に予想できる。
- 18) ・低学力化していると感じます。
 - ・根拠：この5～6年、同じ講義あるいは、それ以上に手間をかけて指導してもついて来られない学生が多い。
- 19) 経験的にはそう思いますが、低学力化の意味について私自身よく理解していないと思います。
- 20) 年々、一方的に低下しているとは思わないが、全体的には低下傾向にあると思う。
- 21) 年度によって変動はあるが、低下傾向が明らかかといえば、そうとは言えない気がする。ただ、できない数名の学生が必ず毎年いることは事実。
- 22) 全般的に見て、低学力化というよりも、努力不足と考えられる。毎年行われている担当科目の定期試験では、前年度留年者が出た次の年は試験の成績が良い傾向が見られている。
- 23) 低学力化している可能性はあると思います。ゆとり教育によって学んできた内容・時間が少ないため低下しているのではないかと思います。

- 24) 昔から低学力の学生は相当いました。今に始まったわけではありません。
- 25) 大学に勤務してから2年半ほど学生に接しているが、自分自身が学生であった頃に比較して学生の能力に大きな差が在るとは思えない。しかしながら近年学生が受けている試験内容や実習内容は自身が学生であった頃から大きく変化している。例をあげれば選択問題形式の試験問題が増加し、講義時間が短縮されている一方で講義科目が増加した。その結果、与えられた選択肢のなかから正解をいかに早く解答するかの様な能力に、学生の学習方法がシフトし、記述式問題に対して多様な知識と正しい用語を使用して自分自身の言葉で解答する能力は低下しつつ在る様に感じる。
- 26) 全体ではないが、一部の学生は低下していると思う。根拠としては、レポートにおける文章能力の低下が見られる。
- 27) そうは思わない。以前（今から15年以前）はもっと低かった。
- 28) 私が本学に赴任してから、まだ2年半しか経過しておりません。この期間内では学力の変化はさほどないと考えます。
- 29) 低学力化してるとは思いませんが、自分の言葉で文章が書けない、言葉で説明できないと思います。
- 30) 本学では、薬剤師国家試験の合格率が2000～2009年の10年間、ほぼ9割で推移しており、学力が低下しているとは思えない。ただし、危機感は常に必要。
- 31) 以前の状況が分かりませんが、定期試験の平均値が年々下がっていると聞いています。理由の一つを強いて挙げるとすれば、入学時の偏差値が低下していることが原因かもしれません。
- 32) 低学力化しているかどうかは不明。
- 33) 20年度入職により比較検討ができる経験、データがなく、コメントできない。
- 34) 考えていない。
- 35) 基礎系の先生方からは、その様な話しを耳にしますが、私自身は赴任してからの年数も浅く、薬剤師としての実学を中心に教育に関わっているため、低学力化したか否かは分かりません。
- 36) 今年度より着任したため、まだその変化を感じる機会がございません。
- 37) 4月に赴任したばかりなので以前と比べることができない。
- 38) 4月から着任したばかりなので、まだ把握しきれていないが、毎回の授業で提出してもらっているリアクションペーパーの記述に誤字・脱字が目立ち、文章が分かりにくいとは感じている。
- 39) 着任したばかりなので、わかりません。
- 40) 昨年10月に赴任したばかりなので、比較対象がなくその判断ができない。

2. 担当する授業をすすめるうえで、学力と関連して、どのような困難・問題を感じていますか。

①担当学年 科目名

②授業を進める上での困難

③あなたは、その困難を解決するために、どのような工夫をしていますか。

このFDでは、第1日目の終わりに、「学力に焦点をあてた工夫された授業」としていくつかの授業を5分程度で紹介いただく授業紹介の企画があります。これも考慮して、具体的にここにご紹介願います。

1)	①	第2学年（薬物治療学） 第3学年（病態生理学） 第4学年（演習講義） 大学院（臨床薬理学）
	②	現在のところ特にありません。私語も目立って多いようには感じていません。
	③	授業の終わりに、その日の講義の内容に照らし合わせたミニテストを行い、出来るだけ自分で考えるように指導しているつもりです。
2)	①	3年生 衛生薬学実習
	②	実習の意味等を考えず、実習の最後に質問してもなかなか答えられない学生が多い。
	③	実習講義で基本的なことの説明も加えるようにした。
3)	①	授業なし 薬学部 医療薬学Ⅱ実習を担当
	②	特になし
	③	担当授業なし

4)	①	第3学年 物理薬剤学
	②	普段計算になじんでいない学生が多く、対数計算、因数分解、濃度計算などに弱い。
	③	関連する国試問題（過去13年分）の配布 過去3年分の定期試験、再試験問題及び解説書のコピー可能 質問（授業終了時及びいつでも）に対応 授業中の私語禁止 など
5)	①	記載なし
	②	学力に直接関係するとは思いますが、調べる能力やまとめる能力が不足していると感じている。
	③	記載なし
6)	①	2学年 薬物治療学入門、3学年 病態生理学 I
	②	私語、遅刻、途中退出が多い。プロジェクターの写りが悪い。
	③	その都度注意する。教員よりも学生に対して研修をしてみてはと思う（講義を受ける時のルールとそれを守らなかったときの罰則などについて）。
7)	①	4年生 調剤学
	②	・あまりノートなどを取らずただ聴いている、という学生が多くなっている。 ・教科書を最大限活用して授業を進めようとしているが、指定された教科書を持たずに講義に出席する。
	③	月並みなことですが、 1) 後から見でも分かりやすいように工夫した講義プリントを配布している。 2) 以前に比べてかなりゆっくり講義を進めている。したがって、講義全体がシラバス通りに進まない。
8)	①	2学年 生化学
	②	・学力、要望が多様である。 ・自信がない。
	③	後者について、実習の場合、濃度計算など、できるのだけれども自信がなく、それが仲間内で解決できない、もしくは学生としてプライドを捨てているのか、すぐ教員に「これでいいですか?」と聞いてくるので、簡単な問題で自信をつけるようにしてみた。
9)	①	6年 臨床実習 3年 公衆衛生基礎実習
	②	「静かに、話をやめなさい」「すぐに着席しなさい」「テキストはしまいなさい」このような教員の指示にすぐに従えず、こちらが何回も繰り返すか、怒鳴るかしなければ注意を向けることができない生徒が増えてきている。我が子（小学一年生）の授業参観と比較しても、遜色ないと思うこともある。
	③	実習の担当が多いので、なるべく単純で判りやすいプロトコールを作成する。スライドや、絵、動画を使用し記憶の助けとする。そしてプリントを使用し、教員の話聞き逃しても実習が行えるように工夫をする。 助教なので、現在授業はほとんど担当していない。実習に関しては、「この時間で覚えなくてはいけないこと」を明確にして、必要なら実習後試験を行い、確実に覚えてもらう。少なくとも授業をうけた意味を見いだしてもらうことを目的とする。しかしこのやり方だと、逆に実習内容に興味を持って積極的に行ってくれている学生にとっては、必要最小限のことしか伝えていないため、物足りないことが有るようだ。これが今後の課題である。
10)	①	歯学部3年後期 橋義歯補綴学
	②	関連基礎科目の知識不足
	③	特に工夫はしていない。

11)	①	第3学年 保存修復学、第5学年～6学年 臨床実習、歯科医学総合講義
	②	1) 保存修復学は臨床科目の中で最も早期に学習する科目であるが、保存修復学を学ぶ上で必要な基礎科目に関する知識を身に付けていない学生が多い。 2) 日頃、復習・予習の習慣が付いていない学生がほとんどであるように思う。 3) 臨床実習時(第5学年)、国家試験対策時(第6学年)になると学生間の学力の差が大きく開いてしまう。
	③	講義では、初回2コマを使って、保存修復学を学ぶ上で必要な基礎科目の知識について学生に質問形式で行って、知識の統合を図っている。また基礎実習では、基本的な歯のスケッチにかなりの時間を割いている。さらに、講義では、知識の確認のために開始前10分間前回学習した範囲に関しての小テストを実施している。基礎実習では、前回およびその日の実習内容に関して出題し、学生が復習・予習の習慣を付けられるような小テストを実施し、その日の実習にスムーズに入り込めるような工夫を行っている。これら的小テストは学業の評価においては、筆記試験、実習試験、出席状況とならんで大きなウェイトを占める。
12)	①	歯学部 4年 全部床義歯補綴学(実習)
	②	実習書を読むだけで理解できる学生が少ない。また、一方で実技教育(実習)を担当する教育スタッフは数年前に比べて半減している(主に助教以下の若い教室員)。
	③	・授業冒頭での示説に時間を多く割いている。 ・学生がオンデマンドで自由に閲覧できるビデオ教材の拡充をはかっている。 ・実習に用いる物品を一部既製品に置き換えている(一部の工程を学生が自験しない)。 ・(後ろ向きの工夫(?))ですが実習内容を減らし、合格基準を下げている。
13)	①	歯学部1年 器具取り扱い実習・歯型彫刻実習、歯学部2年 組織学実習、人体発生学
	②	・歯学部1年の実習では小グループ制の指導方法をとっており12～15名の学生につき1名の教員が指導にあたっている。実習内容は学生個人の手先の器用さと経験によって実習進度の差が大きいため、進度の遅い学生には時間をかけて指導することとなり、グループ内の学生指導に差がでてしまう。 ・歯学部2年の実習では現在約110名の学生に対して4名の教員で学生の指導に当たっている。学生は質問事項が在る場合、自己申告により実習室内の教員を呼び止めて質問を解消する。よって疑問や質問を持ちながらも質問せずに、理解せずに実習項目をおわらせる学生が潜在的に多いと思われる。また先輩のノートを写した状態で実習を終わらせる学生が、実習後期に向かうにつれて増加する。どちらもその講義内の課題を終了させることが学生の目的にすり替わっており、自分自身が真に理解したかということについておざなりになっている。
	③	実習では学生の着席している座席の間をなるべく短い間隔で移動しながら、実習進度を確認している。歯型彫刻実習では不器用な学生について、実際に本人のそばでやってみせ、やらせてみせ確認させている。 課題の丸写し等については実際に指摘するもしくは、実習時間内に自分自身で実習を行うことを積み重ねて初めて得られる理解について、実習時間に顕微鏡をのぞく事を放棄することによる無意味さについて先輩の視点から伝えている。
14)	①	(定期的には受け持っておりません。)6年生 総合歯科医学講義
	②	6年生の講義では、4年生の学習した基礎的な内容を基に、5年生の臨床実習で実践的な力を身に付けた上での講義となります。しかしながら、4年生・5年生の講義・臨床実習の達成度が学生によって異なっているため、講義のレベルをどこに合わせてよいか難しいと思います。
	③	時間に余裕のある限り、基本的な内容から話を始めるようにしています。
15)	①	歯学部4年生 歯内治療学・歯周治療学 歯学部5年生、6年生 臨床実習
	②	スライドや黒板を使って説明しても、立体的に理解できる学生とそうでない学生がいる。自分が理解できるレポートを書くように指示しても、教科書を写しているだけで理解できない。数年後に自分で実際に治療するという目線で臨床実習に参加していない。
	③	Surgicamを使った教材を利用し、よく見える実際の臨床の術式を示す。

16)	①	4年生 歯周病学 歯内治療学
	②	特に学力と関係して困難は感じていません。ただ現在の歯科の教科書が分担執筆であるせいか、著者の関心のある一部分の知識が非常に深く解説されており、さらには解説もなく用語のみ掲載されている場合もあることに難しさを感じます。
	③	過去の授業の記録を基に教科書を見ながら過不足のないように心がけています。またプリントを配布して、ポイントとなる部分の穴埋めをしてもらいながら授業を進めています。
17)	①	3～6年 歯科薬理学、臨床基礎学、歯科医学総合講義など
	②	理解するのに時間がかかる。繰り返し説明する必要がある。勉強しない。
	③	・むずかしい話はしない。・複雑な話、専門的な話はしない。 ・何が要点か、何が重要かを明確にする。・教科書に頼らない。教科書に依存しない。 ・板書する。・PC、パワーポイント授業は行わない。 ・質問を促す。・成績判定を厳格に行う。
18)	①	3年 薬理学
	②	できる学生とできない学生の学力差
	③	基礎的な内容と専門的で難解な内容を織り交ぜつつ、基礎的な内容は繰り返し取り上げる。
19)	①	1年生 経済学
	②	集中力が続かない学生に対して、学問に向き合う動機づけの仕方が難しいと感じています。
	③	学生の学問に対する関心をひきつけるために、学生にとって身近な事実を紹介し、それを経済の視点で考察するとういうことがわかっていくということを示した上で、分析の方法や理論を教える、という順番を意識して講義を進めています。
20)	①	老年看護学
	②	私語が多くなっている。授業態度が悪くなっている（携帯、飲食、内職等）
	③	学生が理解できない個所を明確にして説明を加えられるよう、各授業の終わりにレスポンスシートとして、質問や意見などを書かせている。
21)	①	小児看護学、小児看護学演習、小児看護学実習
	②	①計算式（肥満度や体格指数）に基づく計算ができない学生が数人います。これは以前からの傾向です。 ②小中学校で習う漢字を書けない学生がいます。
	③	実習指導者からも、「ひらがなが多すぎる記録」について問題提起されている事もあり、小児看護学実習の前の課題として、小児看護でよく用いる症状や病態に関する漢字の読み書き問題を課しています。
22)	①	2年 ソーシャルワーク直接援助論
	②	・授業中クラス全体に問いかけてもリアクションが全くなく、個別で質問すると、的外れな応えが返ってくる。 ・授業に対しての意欲が感じられない。
	③	まだ具体的な対応が考えられていない。
23)	①	2年生、3年生 地域看護学の演習、実習
	②	小グループでの実施ではあるが、グループごと・グループ内の理解度に差がある。
	③	一人で担当している科目はありませんが、部門全体では、以下のように工夫しています。演習は小グループで実施し、学生の理解度が把握した上で個別指導しやすい体制にしている。学生が提出する記録物には、個別にコメントしフィードバックを徹底している。
24)	①	社会福祉導入演習G指導（1年）、臨床福祉基礎実習指導I（1年）、臨床福祉実習指導I（3年）・II（4年）、障害者福祉論II（3年）、当事者論（3年）、社会福祉援助技術現場実習指導II G指導（3年）、卒論指導等（歯学・薬除く今年度前期のみ記載）
	②	・入学動機、福祉で学びたいこと、やりたいこと等の問題意識、自己選択と自己決定力が不足する学生 ・基礎学力が不足する学生（わからない文字・語句を調べる姿勢、テキスト読解力、関連づける力） ・基礎的学習姿勢が身につけていない学生（教科書を携帯していない、ノートをとらない） ・実習計画や課題計画を自ら主体的に作成・具体化することにつまづきが多く、依存的である学生。

		<ul style="list-style-type: none"> ・実習ケース研究では支援領域の基礎的知識・観察評価・支援技術の基礎が不足する学生(カリキュラム問題も) ・レポート作成において自ら課題や体験内容を整理・再構成し、分析しまとめて書くことに難しさがある学生。 <p>(教育課程とシラバス等の関連性を踏まえたカリキュラムの体系性に基づく授業の問題一個々に分散)</p>
	③	<p>通常のレジメ・資料、DVDの視聴覚教材の使用の他に、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業に当事者や支援者の講師の参加により生の声を聞き、実感をもって支援を理解し学ぶ ・授業毎に10分程度、授業のまとめと感想を書くアンケートの実施(当事者論、当事者の講義) ・計画書・報告書の添削指導により、客観的に調べ、分析し、まとめる、文章の錬成の過程を徹底する ・授業で実践活動・自主活動へ導入・組織化：手話サークル、特別支援教育学生支援員等、スクールアシスタントティーチャー、司法福祉研究会(BBS予定)、当事者交流会等を組織化・実践化している(70名前後組織)。
25)	①	全体的にそう思います
	②	普通用語の理解がされていないことや、過去の授業内容をあまり覚えていない点。
	③	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ詳細な講義レジメの提供(メモをとらないという逆効果もある) ・レポートの添削をできるだけいねいに行う
26)	①	看護技術各論(講義)、看護技術演習(演習)
	②	じっと人の話を聞けない、単純な課題ができない
	③	学生達の自分の生活に引きつけられるような例示やテーマで考えさせるようにする。さらにできるだけ学生とやり取りする時間を作る。
27)	①	2年生：社会福祉援助技術演習、3年生：社会福祉援助技術現場実習
	②	記録の作成にあたり、語彙が少ないため日記のような内容になる。人の話を聞く、自分の意見を伝えるといった基本的なコミュニケーションが取りにくい。
	③	記載なし
28)	①	科目、講義は担当していません。3年前期の演習と3年後期・4年前期の臨地実習を担当。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられた資料や講義、教科書の内容を理解するために、あるいは更に知識を増やすために、自分で調べ考えるということができない。そのため、演習・実習に必要な基礎知識が備わっていない。自分で考えるということをしないので、持っている知識を活用できない。 ・学ぶという基本的な姿勢がない学生が多い。
	③	主に実習でのことだが、字面で物事を覚えるのではなく、その意味を理解し覚えることの重要性について感じてもらえるように関わっている。例えば、身体の中の機能に影響があるから、この症状が出現するとか、この状況であるから看護援助はこのようになるとか。
29)	①	臨床心理学科 解剖生理学
	②	あまりないが、全ての学生が十分理解しているか疑わしい部分もある。
	③	できるだけ、学生の興味を引くような方法で、臨床心理学科の特徴である「こころと脳」との関連性を重視して話を進めている。また、面白そうな資料をスライドにして、学生を引き付けるように努力している。単なる教科書上の事実羅列を難しく教えるのではなく、「なぜ、男と女は引き合うのか?」「なぜ、胃は消化されないのか?」など、学生が興味をもちそうな雑学的な話題を科学(解剖生理学)と結びつけて話すように心がけている。教科書から外れながら、基本的なことを教えた方が、学生は興味を持って聞くように思う。
30)	①	3・4年 専門演習、卒業研究
	②	事前に配布してある論文を読めない。内容も理解できず、レジメもまとめるという記述ではなく、抜き書きである。英語の論文にいたっては1ページ読むのに1時間かかることもあり、不可能となった。やりたい研究が思いつかず、3年生までの授業内容の中から見つけることができない。
	③	英語の論文を読むことを中止した。従来の大学院をみすえた内容から、一般企業就職で必要になるメンタルヘルス内容へ変更し、就職組でも興味を持てるように配慮している。一部の優秀な学生には別な課題を出している。

31)	①	1) 言語1年 言語聴覚医学 2) 言語2年 失語症学 3) 臨床心理2年 神経心理学 4) 言語3年 高次脳機能障害学
	②	1) 理解できない 2) 理解できない、講義に集中しない 3) 興味を持たない 4) 理解できない
	③	0) もともと、power point (視聴覚教材) は使っており、講義のレジメも必ず配布 (これは工夫ではなく、教員としてあたりまえのこと) 1) 興味を持たない→導入しやすい内容、身近な話題におきかえたおすすめ方に変更 2) 理解できない→ひとりひとりに点検シートを渡し、ひとりひとり添削した。
32)	①	3年生 高次脳機能障害学、失語症学演習
	②	言語、記憶などの高次機能検査・訓練の内容をイメージできない。
	③	学生同士で、実際に患者さんに行う言語、記憶などの高次機能検査を行ない、検査の要求する脳機能を実感した上で、関連する講義を行なうことで現実感を持てるよう工夫している。
33)	①	失語症学 (2年次) 関係法規 (3年次)
	②	動機づけの低さ、文章理解の困難、等
	③	授業開始時に、項目、キーワードを提示してから講義に入る。 授業終了時に、Q&Aの時間を入れる。
34)	①	1年 基礎統計学
	②	理系科目なので、と敬遠してしまう学生がいる。
	③	とにかく試験で一定レベルに到達しなければ容赦なく不合格となることを分からせる。そうすると否が応でも勉強せざるを得なくなると思う。
35)	①	言語発達障害学特論 (3年前期必修科目)
	②	以前は少人数によるグループワークを多く取り入れていた。講義中に取り上げたトピックについて学生たちにディスカッションをさせ、その内容をグループごとに発表させていた。私は教員として、答えを教えるのではなく、考え方を教え、発表に対してコメントをしていた。しかし、最近、ディスカッションがだんだん盛り上がりなくなり、グループワークの実施が難しくなってきた。
	③	よい解決策はまだ見つかっていない。暫定的な解決方法として今年はグループワークの回数を減らし、オーソドックスなレクチャータイプの講義を増やした。
36)	①	1、2学年 歯科診療補助
	②	講義、実習を行なう際できるだけ具体例を挙げイメージ作りしやすいよう心がけていますが学生がどの程度理解でき、興味関心をもって参加している講義、実習であるのか不安です。
	③	できるだけ多くの学生自身が「参加している」という能動的な気持ちを持つことができる授業の展開を検討しています。例えば順番に教本を朗読してもらうことで各々の学生の理解度を教員側が把握するようにしています。またある程度理解の深度段階の発問の種類と回数を準備し可能な範囲で回答する機会を増やすよう工夫しています。その結果一方通行の講義、実習ではなく学生自身が積極的に思考する機会が得られていると思います。
37)	①	歯学部、看護福祉学部の1年生 基礎生物学
	②	生物の知識に関して、多様なレベルの学生が受講している。レベルは落としたいくないが、どのレベルまでならば許されるかについて悩むことがある。
	③	2つの評価法を導入し進めている。授業の最初に「診断的評価」を行ない、学生の学力を簡単に知り、それを基にその日の授業内容を組み立てている。また、毎回の授業最後に、その日の内容に関しての「形成的評価」を行ない、どの程度理解したかを評価している。また、質問カードを利用して疑問点などを記載してもらっている。それらから得られる情報を基に、次週の始めに補充的説明を行い、一定水準のレベル維持を図っている。
38)	①	歯学部1年 人類学
	②	自分の考えを述べさせようとしても、ほとんど答えることができない。
	③	考えをまず書かせてまとめてから発言させるようにする。 辛抱よく答えを促すようヒントを与えながら待ち続ける。

3. ①あなたは、学力に関連して、その他にどのような問題に気付いていますか。

②どのような方策（授業その他の教育指導）が必要と考えますか。

1)	①	一生懸命勉強しているが、細部にとらわれすぎ、系統的に学ぶことが出来ない学生もいるのではないかと、思っています。
	②	前の座席の学生は講義を熱心に聞いていますが、後ろの学生まで目が届きません。後部座席の学生も、前方に座れば、緊張感が出るのではないのでしょうか？距離感は大切だと思いますので、座席を決めるの（一定期間変更）も一案かと思えます。
2)	①	学生の勉強の仕方、特に暗記物についてはもっとやり方を工夫してもいいと思う。理解力は、過去の学生とくらべて極端に低くなっているわけではないと感じている。
	②	やり方は各自が考えて行くしかないが、例えば点数が悪かったら、次は勉強の方法（ノートでもまとめ方、覚えるプリントの作成など）を考え直すのも大切。
3)	①	学習意欲の低下に伴う学力の低下である可能性もあり、単純に知識としての学力の低下と述べて良いのか分からない。
	②	学習意欲の低下に伴う学力の低下であるならば、学生に対して学主の目的意識を抱かせる授業内容、カリキュラムなどが必要となると考えられる。
4)	①	年毎に、同一学年における学力差が拡大しているように思う。授業内容を簡単にしないと低学力学生は全くついて来ることができない。
	②	薬学部に関して言えば、能力別に2クラス制を導入する方が学生の理解度に応じた授業を進めることができ、強いては学生の学力アップに繋がると思う。
5)	①	学力がそれほど落ちているとは考えていないが、試験は終了すると忘れてしまう学生が多い。
	②	特に考えていない。
6)	①	担当授業を持っていないため具体性に欠けるが、実習実験やその他の授業（薬学基礎研究など）で学生と接してみると、あまり質問が来ないと実感した。納得が行かず、とことんまで質問してくる学生がほとんどいない。これは学力に影響してくる気がする。
	②	授業は理路整然として淡々と済ませる方向で良いと思う。ただ、内容を学生に簡潔にイメージできるような進め方が良く、視覚化や具体例などを頻発して講義していくことが良いかもしれない。また、大事なのは学生との距離感と思う。学生と教官の間が隔絶したような雰囲気では、講義終了後や後日に質問に来ることもない。教官の部屋は常に開かれた雰囲気であるべきと思う。
7)	①	学生の学習意欲の低さ（歯科医師という職業に夢を持たずにいる）
	②	大学の外で臨床医として活躍している卒業生の生の声を聞かせて、学習意欲を高める（学外実習：卒業生の診療室に見学に行かせるなど）
8)	①	試験至上主義で、「とりあえず点数を取らなければ」という感じで、じっくり取り組むところをスキップして、答案付き過去問題、予想問題のみに取り組む人が多すぎる。
	②	日々の講義でじっくり取り組んでいることを評価できるようにしたほうがよいのかと考える。
9)	①	自主的な学生が減って、言われたことだけをやる受け身の学生が増えてきた気がする。
	②	一方的に教えるだけでなく、自分で興味を持ったことを自分で調べさせたりするように工夫する。
10)	①	学力とは直接関係ないかもしれないが、モラルや一般常識に欠けた学生が増えていると感じる。
	②	モラルや常識は、生活して来た環境により培われるものだと考えているので、大学でそれに対してどこまで指導できるか（するべきか）は考えものでもある。
11)	①	学力に関する情報は持っていない。実習中に把握するように努める。（質問する。）
	②	学生が自ら勉強（予習、復習、レポート等）しなければならない環境作り。授業方法のテクニカルな方策の要素は小さいと感じています。解りやすい講義を行なう事は大前提ですが。

12)	①	最近の学生は、定期試験に出題する項目、そのものみのみの（試験問題の解説のような）講義を望んでいるように感じる。
	②	記載なし
13)	①	学生は与えられた課題から正解を早く得たいという欲求のあまり、時間をかけて自分自身で行動したり、考える事を行なわなくなる傾向が年々進んでいるように感じている。しかしそれらは学生の本来の能力によるものではなく、むしろ周囲の環境によって形成されてきたものであるように思う。自分自身もかつてそうであったように、積極的にそのような自分を変えていこうと思う意識が必要であり、またそのような自分に気がつく必要が在ると思われる。
14)	②	試験問題、課題についての疑問→自分自身で調べる（調べる方法を教える：教科書の目次を読む、索引を引く、図書館へ行く、インターネットで検索するなど）→調べた結果を理解する（自分の頭で考える。考えてもよいのだということを教える）→理解したということはどういう事かを確認する（正しい用語を使って自分の言葉で説明させる）等の練習が必要だと思われる。
15)	①	1学年の学生間の学力の差が大きい。
	②	学力に合わせた少人数での授業
16)	①	専門用語について英語でどれだけおぼえてもらうか難しいと思っています。
	②	必要な単語を厳選しておぼえてもらうことが必要と思います。
17)	①	学生自身は基礎的な内容を良く理解しているつもりで、難しい内容にチャレンジしたがる傾向がある。
	②	定期試験の前に自分の学力を客観的に把握させる。
18)	①	学生の数に対して、教員の数が足りないような気がします。また100人近くの学生に講義を行うと、学生からの反応が希薄となりやすい傾向があるのではないのでしょうか。教員数とも関係すると思われませんが、すべての学生に目が届かないと感じます。
	②	学年全体を対象とした講義のほかに、小グループに分かれての講義や演習をさらに取り入れるとよいような気がします。
19)	①	・留年率が高い。 ・複数回留年する学生が多い。 ・在学年限（12年）に達し、退学する学生がいる。 ・ストレスによる神経症。
	②	・複数回留年した学生に早い段階で方向転換を勧める。 ・学生とのコミュニケーションを頻繁に持つ。
20)	①	生活習慣がきちんとしていないので、学力を養う以前に学生生活の条件が整っていない。
	②	必ずしも教員の責務とはいえない側面もあると思いますが、眠気を誘う声質で講義を進めると学生が寝てしまうことや、話し方が硬すぎると学生は理解しにくく感じてしまうことなど、学生の学習意欲をそぐ要因をふまえて、学生をひきつける工夫を模索することが必要かもしれません。
21)	①	ゆとり教育以降やはり学力低下しているように思う。
	②	ものによっては、マンツーマンあるいはグループによる少人数学習。（ゼミなどが該当する）
22)	①	電子辞書や携帯電話の辞書機能は使えても、紙媒体の辞書の引き方がわからないという学生が最近多くなった印象があります。
	②	全員に共通している問題というよりも、一部の学生において、気になることなので、その都度、個別に対応しています。
23)	①	本を読まない、読めない（読んでも理解できない）学生が増えている。
	②	課題図書的なものに関するレポートを書かせることも必要かと考える。
24)	①	考える前に答えを求める傾向
	②	学生自身、自分でじっくり考えたり、読み取る力をつけていくことが必要ではないかと感じる。
25)	①	・講義を聞きながら、ノートを取っている学生が少ない。 ・レポートの書き方を知らない学生がいる。
	②	基本的な読む、書く、伝える力を実践的に教える科目が必要。

26)	①	臨床福祉学科は、実質的に全入となっており、そもそも学生の質の担保が困難である。
	②	記載なし
27)	①	特になし
	②	授業や教育内容の検討はもちろん大事であるが、それ以前に、専門職業人としての知識・技術を身につけるために自分は学んでいるのだという自覚を、学生にもってもらいたい。その姿勢がないと、教育内容を検討しても効果は生まれえないと思う。
28)	①	記載なし
	②	福祉支援は、ニーズをもつ人とかわり、理解し、必要とする求めに応じて対応する力や自己認知が必要である。教員自ら福祉実践に基づき、教育、研究を推進する3要素が問われている。福祉実践に基づく実習指導、実践と現場を基盤に講義や実習指導、研究が必要。
29)	①	確かに一部分学力の低い学生はいるが、大部分は教育で引き上げられる学生なので、そちらに教育の水準を合わせるべき。そうしないと、今度は優秀な学生がつまらなくなるし、伸びないことになる。学力の低い学生は何とか対応してやらなければならないが、それでもレベルに達しなければ落第・脱落させるしかない。
	②	個別指導が理想だが、担任がそれを行なうのは現在の体制のままでは負担が大きすぎる。また、あまりに手をかけると自助能力 (active) を削ぎ、学生はもっと甘えてきて、passiveになり、勉強しなくても何とか救ってくれるという逆効果になる可能性がある。
30)	①	ありません。
	②	ひとりひとりの理解・進捗状況を把握する。
31)	①	私の講義では、過多にプリントを配布せず、学生にメモをとる練習をさせている。しかし、最近の学生はポイントをおさえて、メモをとることがなかなかできない。(プロジェクターでスクリーンに映し出されたものを、すべて丸写ししようとする学生が多い。) また、学生のレポートを読んでいると、日本語の文章能力が低いことが気になる。
	②	記載なし
32)	①	社会経験の乏しさが原因と思われるコミュニケーション能力の欠如、成人としての自覚の欠如が見られる。
	②	1年生からサークル活動、アルバイト、ボランティア活動を積極的に行う。
33)	①	締切を守るなどの基本的な生活態度からして、守れない学生が増えている。
	②	従来の大学での講義内容を理解できなくなった学生には、中学・高校の補習的内容が必要であり、成績優秀者と教育内容を変更して、実質的にはコース制を採用するしかないように思える。それらの学生には、講義形式では理解できず、ほぼ一対一での対応が必要である。
34)	①	臨床実習中段階(第2学年)の学生がマニュアルがなければ動くことが出来ず臨床の現場で自ら考え行動することを難しく感じているように思います。
	②	自分の考えを持ち実践する力が学生には必要だと思います。
35)	①	学力と別に精神的な運動資質の低下を感じる。たとえば、80分の授業時間、終わりまでじっと集中できない学生がいるなど。
	②	授業導入部での説明の工夫、全体の授業内容の流れに変化を持たせる工夫、また途中で一息を入れるタイミング、などについて工夫を図る必要がある。授業以外の時間で学生を一人の人間として捉え、教員のキャリアを知らせていくことが必要である。
36)	①	国試に直接結びつく基礎学力～合格学力における低学力を判定するための、各学年における学力判定の基準が明確になっていないのではないかと。 教養科目に関しては時間的に余裕のあるカリキュラムが必要。
	②	学力判定の方法と対策を制度として作る。 補習授業の制度を作る。
37)	①	まだわからない。
	②	入学前教育、初年次研修。

4. FD研修の機会に、学力に関して、意見交換したい課題はありますか、あるいは知りたいことはありますか。

- 1) 今までのFD研修で行われた課題と対策、または具体的な成果を教えてください、今回の研修にも役立てたいと思います。
- 2) 講義の経験はそれほどありませんので、とにかく今回の研修をこれからの学生教育に役立てていきたいと考えております。
- 3) テーマとなっている「学力」とは具体的にどの時点でのことを目指しているのかわからない。大学入学時点なのか、卒業時なのかによって方策は多様化するであろうし、目指すものによっても必要となる学力は異なってくると考えられる。
- 4) 特に意見交換したい課題は無い。しかし、何を「学力」とするのかは私には分からないので、その辺りが理解できればと考えている。
- 5) FD研修会は初めてなので、いまは思い浮かびません。
- 6) 低学力化した学生へのケアをどのようにやっているか、具体例を紹介してほしい。
- 7) 当大学や他の多くの大学の有名な授業の例を聞いてみたい。名物先生や人気のある講義には必ずヒトをひきつけるものがあり、好奇心を引き出して学力を向上させているはず。
- 8) 学生の学力の現状や授業の中での工夫、入学前教育の方法・内容や効果について、他学部の先生方から伺いたいです。
- 9) ・他学部、あるいは他大学の取り組みについて
・ここ数年の、学力に関する日本の傾向や特徴
- 10) 他の先生方が行っている講義の工夫を教えてください。
- 11) 今年度の新入生の学力の現状
- 12) 最終学年の予備校模試の成績が全国歯学部下位にある現状を、学生、教員が早期に予想、認識することは可能かどうか。ご意見をお聞きしたい。
- 13) 定期試験等の筆記試験では、どのような形式の試験にすると学力向上につながる学習ができるのか？（詳細に確実な知識が必要な記述式試験、国家試験と同様で広く浅い知識で解答できる5肢択一式試験がよいのか？）
- 14) 大学生の学力は本当に低下しているという統計学的なデータが在る場合、それを提示してほしい。もし学力低下の背景には初期教育からの影響がある（義務教育）と考えられる場合、何年前と比較してどのくらい低下しているのか、数値的に教えてほしい。またどのような項目で学生の学力を算定しているのかを知りたい。
- 15) 現在の中学校、高校の授業内容について知りたい。
- 16) 必要な知識と不要な知識をどのように選別しているかを知りたいです。
- 17) 留年を繰り返す学生に退学を勧めることは是か非か。
- 18) 具体的な事例と対処法や効果
- 19) 具体的な取り組みの成果
- 20) 看護学科の学生に関しては、学力に関してというよりも、学習環境を整え、本人に学習の必要性を動機付けしていくことが優先かと思えます。
- 21) 福祉士養成校協会「現場実習前コアコンピテンス案」、「OSCE案」当の導入動向には、系統的標準教育・実習内容の保障が前提。シラバスの系統的分担が必要。カリキュラム・意識改革が伴う。実態はどうか？
- 22) 大学の大きな方針として、「手当て」の方向で行くのか、「自助努力」の方向で行くのか、大学の将来がかかっていると思う。教育への努力は各人行なっていると思うが、あまりに低学力の学生の教育に偏重すると、逆効果になる可能性が高いと思う。
- 23) 入試の成績に低下傾向がみられているのかどうか。
- 24) 平均的な学生と比較し理解力が低い学生に対して国家試験に対する支援について（時間、内容）教えてください。
- 25) 学生中心とした、学生の能力を意識した授業法、授業技術について
- 26) 勉強に対する動機づけをどうするか。

5. 学生の学力向上のために、普段から教員が示すべき、態度・習慣、指導はどんなものがありますか。

- 1) 学力向上に直接関係はないかと思いますが、講義で解らなかつた箇所などについてはいつでも教員に聞きに来られる環境整備をより一層進めるべきだと思います。
- 2) 学生のみでなく、教員も日々勉強に取り組んでいることが伝わるような、態度・習慣・指導であれば良いと思います。
- 3) それぞれを覚えさせるだけではなく、原理や多科目との関連性などをしっかり理解させるよう心がけたい。
- 4) 「普段から」というのが何時なのかわからない。例えば、講義をしていないときに学生と顔を合わせるのは、質問に来た時であると考えられるので、態度や指導は自ずと決まってくると考えられる。個人的な解答で申し訳ないが、学生が質問に来た際には答えを直接は与えず、必ず学生に問答して考えさせ、自分で答えを導きだせるようにしている。
- 5) 専門教育においては、学習に対する目的意識を持たせることに伴い、学習意欲も向上するものと考えられる。そのための指導が必要ではないかと考える。
- 6) 学生が質問に来た場合には、時間の許す限り理解が行くまで説明している。しかし低学力の学生ほど、質問にくるような積極さに欠けている。
- 7) 学習は試験を通るためのものではなく、将来の自身の職能に役に立つことを自覚させるような自覚を持たせたいが、学生とそれを語り合う場がない。
- 8) 学生との距離感が重要。個人個人に親身に耳を傾ける姿勢が大切で、自分を見てくれていると感じる学生のほとんどはその後努力をするだろう。教官は学生とチーム（同列）というよりも、親のようであり、軍曹であり、学生を心技体を備えた薬剤師としてたくましい存在として世に送り出す責任がある存在と思う。親身であり続ければ、学生は必ず分かってくれる。
- 9) オフィスタイムの有効活用（自由に質問等ができる雰囲気作り）
- 10) 本を読むことを奨励すべきだと考えている。
- 11) 教員は学生になにを望んでいるか、また学生は教員に何を望んでいるか明確にするべきだと思う。たとえば、6年生は国家試験が控えているのだから、国家試験対策が必要ならそれに徹するののも一つであると思う。また、教員が学生を馬鹿にした態度を見せるのは避けるべきだと思う。私事であるが、私はいわゆる「学校の試験」を受けなくなってから、十数年経過している。去年、必要があつて語学試験を受けたが、2時間集中しているだけで大変だった。また、ものを正確に記憶するのがどれだけ難しいかを思い知らされた（年齢のせいもあるが）。ほとんどの教員はテストの緊張感も苦痛も忘れてるので、再びなにかに挑戦してみるのには、学生を教える上で意味の有ることだろう、少なくとも私には有効だった。
- 12) ・相談しやすさ。 ・親しみやすさ。
- 13) 学生が学習するためのアシスト、ホロー役であること。学生の人気取り的行動をとらないこと。差別しないこと。
- 14) 1. 成績下位の学生に対する個別の学習・生活指導を行なう。
2. 日頃の復習・予習の習慣を付けさせる。
3. 夏休み・冬休み・春休みの課題を与え、学業に関してブランクを作らせないようにする。
- 15) 学問的興味、担当教科に関する質問などを抱えて講座にやってくる学生を受け入れる態度や習慣。学生の理解度についてステップごとに確認する習慣（学生の「理解した」「わかった」の答えは真に理解したことを確かめたわけではないことを常に念頭に置く態度。）
- 16) 学生の学習に関する到達度や分析とともに、学生の心理や感情にも配慮し、学生を理解するよう努めることが大切だと思います。
- 17) 学生の身近な先輩である研修歯科医の先生たちが研修を始めて、学生のときにこんなことをしておけばよかったと思うことを学生に語る。教員が何を考えて診療しているかをその都度説明する。
- 18) 臨床でしばしばみられる曖昧さに対して、エビデンスをベースで指導を行うべきだと思います。
- 19) 不本意入学者が増えていることなどをふまえて、広い視野で自分のやりたいことを考えるために、興味がもてなくてもとりあえず授業に出て話を聞いてみるのが大切であると学生にはよく話しています。
- 20) 最近の学生は高校でも教員とフレンドリーに関わっているのか、礼儀がわからなさすぎる。厳しくする必要はないが社会に出る前に礼儀は躰けるべきだと思うし、実践しているつもり。また、授業中おしゃべりが多いのは講義する側にも問題があると思うが、集中力が80分もたないのも事実なので、ときにふれてたしなめることも必要だと思う。

- 21) まず、学習の必要性を学生にわかってもらうこと、そして、一部の必要な学生には効率の良い学習方法をアドバイスする事です。
- 22) 教員の向上心。研究や教育に対する情熱。学生を導く指導者としての常識的な態度。
- 23) 授業では、学生の学力の現状や理解度にあわせた内容や工夫を行う。わからないことをわからないままにしないために、質問しやすい環境を整える。
- 24) ・学生が質問等に来やすい関係を作る。 ・学ぶ事の楽しさを伝える。
- 25) よりていねいで、繰り返し、繰り返しの指導が必要である。
- 26) 学生の状況を確認し個別の対応を考える。この点については、講義を通して行うには無理があると思われるが、実習の担当（4～8名）やゼミ担当（4～5名）は少人数であるため実行は可能かと思われる。
- 27) 教員の実践科学的モデル提示による実践教育指導、大学教員・福祉現場指導者の連携による養成と実践研究。
- 28) 学生が時系列で何をすべきか、マニュアル化する。
- 29) ・高度教育をしようとし過ぎて、何でもかんでも詰め込んで教えるよりは、学生のレベルに合わせて、まず最低限必要な基本的なことを教え、次に応用を教えるべきと考える。
・先生のパッションで学生を細やかに指導していくようなことが必要である。
- 30) 学力が低い学生には、2種類のタイプがあるように思う。1つのタイプは、潜在的な能力はあるのだが、これまで他の事（例えば部活など）に熱中していたために、勉強の仕方がよくわからない学生たちである。もう1つのタイプの学生は潜在的な能力が低いために基礎学力が決定的に足りない学生たちである。
- 31) 努力せずに合格できる科目をなくすこと。定期試験再試験で60点未満の学生は不合格とする。
- 32) 評価を甘くしない。たとえ大半の学生が不合格になろうとも、評価基準を下げることはしない。授業での私語を許さない。出席はとらないこととし、授業に集中する学生だけを対象に講義を行う。
- 33) ひとりひとりの理解・進捗状況を把握する
- 34) 学生と対話する機会を増やすことにより各場面で学生がどのような疑問を持っているのか、何を理解していないのかを教員が把握できます。そのことにより学生が問題解決する糸口を見つけるヒントになっていると思います。
- 35) 学生へのいろいろな指導のあり方で一定の方針が立てられたならば、全教員がその指導においてブレないことが大切である。
- 36) 学生から嫌われようと、きびしく叱れる教師の復権。
- 37) つねに、学生に目をかけているという態度。

6. 学生の学力向上のために、大学としてどのような取り組みが必要と考えますか。

- 1) まず医療人としての人間性を育てる教育（日常の挨拶など）から手を付けるべきと感じています。
- 2) 卒業試験のみならず、進級試験の基準を厳しくし、出来るだけ学生（特に新入生）に危機感をもって勉強して欲しいと思います。大学生の本分は、学業に励むこと、と学生が常に意識するよう、指導していかねばならないと思います。また国家試験のある薬剤師という職業にプライドを持ち、一定の能力以上でなければ出来ないこと、努力と忍耐が必要であることなどを日々教えることが大切かと思っています。
- 3) 全学的に無理に形式を揃える努力よりも各学部がその問題点にあった対応ができる環境、人員（事務も含む）を揃える努力をしてほしい。いろんな新しいことを始めるよりも今までのことを反省してほしい。
- 4) 具体例は挙げることができないが、専門性の高い本大学においては、学生に対する学習への必要性を認識させる事が必要であり、そのためのカリキュラム等の工夫が必要であるかと思われる。
- 5) 教員の多くは、これまで教育方法について特別なトレーニングを受けたことがない。学力格差が広がる中で、どのような授業を行えば大部分の学生から高い授業評価を受けることができるのかを、公開モデル授業などを積極的に紹介して欲しい。
- 6) 環境の良い自習室を多く設営してほしい。

- 7) FDハンドブックを見たところ、教官と学生の関係性を書いている内容ばかり。学生の学力向上には、教官と学生の間のやりとり以外の多くの力が必要。まず、しっかりとした食生活。朝飯を抜く学生が多いだろうけど、朝食を格安でバランス良く食べさせ、心身ともにしっかりとした状態で朝の講義に臨ませるのが良い。もしかしたら、規則的でバランスの良い食生活に関する講義が重要かも。薬剤師として世で活躍するならば、その教官であるべき。定期的な運動も必要であり、体育の時間を増やすべきとは言わないが、6学年を終了するまで、最低限の連帯運動は必要と感じる。これのもう一つの理由が同学年同士の結束を高めるためである。リラックスやストレス解消に重要と思う。

上に、食生活や運動を挙げた。ここから下はさらに重要。

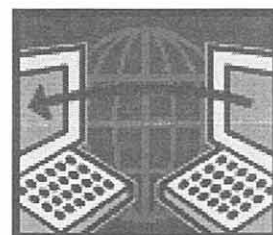
教官が幾ら魅力的な講義をして大体の学生の学力が向上しても、6~8割くらいが合格する程度と思う。100%に近づけるには、大学全体の一体感が重要。特に一番大事なのは、同学年の結束である。一般的な国家試験と違い、薬剤師国家試験は点数を取れば全員合格な訳だから、仲間同士で落とし合う必要は無い。全員で合格しよう！という気概を植え付けるべき。成績の悪い仲間を助け、肩を組んで苦難を乗り越えることに喜びを見いだせるよう大学は工夫すべきである。個々の教官は、仲間を見捨てる学生に雷を落とすくらいの方がいいと思う。負傷兵を救わず、前進するのみの兵隊はそもそも医療人として今後見込みは無く、卒業させるべきでは無い。

人間臭くあって良い。一つの有機体の如く前進するには、相互の助け合いこそ生命線と感じる。合格率100%を達成するには、それほどお金はかからないと思う。授業の工夫も大きく変える必要があるだろうか？もちろん、国家試験に合わせる雰囲気が必要だが、学生同士に仲間を気遣い、共に高みを目指す精神を植え付けることができれば、学力向上、合格率100%は達成できる。

近年、ドライな学生が多く気がかりである。一緒に遊ぶことも減っているだろうし、お酒を飲む機会も大きく減っているのを実感する。個として人生を進んでいる感が否めない。ヒトは周りに助けられて生きているのだから、人間臭く、Wetな間柄の重要さを大学でも教えていった方がいい。大学は、自分の身を犠牲にして、仲間を助ける気概を教えればと思う。

- 8) ・成績上位者に対する、表彰制度・飛び級制度の施行
・成績下位者に対する、キメ細やかな個別担任制度（1教官あたり4名程度まで）
・優秀な学生（新入生）をいかにして集めるか
- 9) 選択科目あるいは特別講演を増やして、知的好奇心を鼓舞するようにする必要があると思う。あくまでも任意で。
- 10) しかし、私が学生だったら、模擬試験の回数を増やす、その傾向を分析し、個人の学力向上に役立つなど、予備校で行われているようなことをやってほしいと思う。
- 11) 進級試験問題の保存と閲覧、成績評価表に印鑑を押す立場の教員に所属学部の子生の全成績の閲覧を可能にすること。（試験レベルの評価と学生の学力の把握を目的）
教育に対する評価を過小評価しないこと。（大学の最大の使命は教育。研究ではない。）
- 12) 担任制を充実させて、学生に対するきめ細かな学習・生活指導を行う。
- 13) 教員の子生教育に対する目標設定とその達成率を評価する取り組みが必要だと考えられる。能力が高い学生については個人に応じた特殊なプログラムを認めてほしい。例として基礎研究に興味のある学生については、先端研究を行なっている大学での短期留学制度（1~2カ月）での単位を認めるなどの柔軟な対応を認めてほしい。
- 14) 学生と教員の比率の是正と、若手ドクターのさらなる教育への参加があるとさらによいのではないだろうか。
- 15) 低学年時から歯科医師になるというモチベーションを高めさせること。自分の意見を文章にまとめる、話すというトレーニングを行う。
- 16) できる限り必要な知識を絞って、徹底的に教えるとりくみが必要だと思います。
- 17) ・自習室の整備 ・教員評価における「教育」のウェートの見直し
- 18) 成績下位者への補習講義。出席率を上げる工夫。
- 19) 大学と教員が学生の学力に関する現状をきちんと認識する。
- 20) 必要に迫られていない事もあり、具体策が思いつきません。
- 21) 入るのは難しく、出るのは簡単といった今までの日本の大学の悪しき在り方が、入るのも出るのも簡単な大学になってしまったことで、中学や高校の延長のように、何でも手とり足とりすることが学生のためであるかのように思われ始めていることを変えていく必要はないか。
- 22) 入学前教育の充実。教員のスキルアップ。
- 23) 個別で学習支援を行うシステム（チューター制度など）を作る。

- 24) 具体的には申し上げられませんが、全入といっても、受入れた以上、一定程度の学力の獲得は、私どもの責任であると強く感じています。
- 25) 学力向上に直接的な影響を与えるかはわからないが、私が担当している演習・実習に関して言えば、カリキュラムの見直しが必要であると思われる。専門科目について1年次から段階的に、そして継続的に学べるようになる必要があると考える。国家試験や臨地実習に必要な基礎知識・専門知識が3年生になる頃にはスッポリ抜けている。しかし、3年～4年にかけては、実習等でそれらの知識が求められるため、復習する時間が少なく、その場限りの知識としてしか頭に残らない。実際に学生の中には、1年次から専門職としての知識や技術が学びたいとの声もある（現状では3年時から急に過密スケジュールとなり、学生にとっては余裕のない中で国家試験の勉強を行っていると思われる。）
- 26) ①福祉学生のアイデンティティ（誇り・自信）を確立できる実践的専門教育体制、②個々の目標国試合格水準を保障する教育体制、③実力ある福祉人材養成と質の保障（標準化基準該当）、④大学の機能開発と地域ネットワーク化（福祉実践プログラム開発、専門職養成、専門的研究）、⑤障害学生支援の共学体制の条件整備推進（学生・大学による総合的支援、障害者権利条約合理配慮・差別禁止条項対応）、
- 27) 能力別のグループに分けて、教育する。
- 28) ・学生の手当てはしても、努力しないもの、能力が達しないものは、落第させるという厳しい態度をしめすこと（学生は先生の対応を見ている）。
 ・学生に媚びるのではなく、大学の本来の教育権威をもう一度取り戻すべき。
 ・低学力の学生が多い入学方式などの分析をしっかりと行い、定員の見直し、振り分けをする。
 ・低学力の学生は極力入試段階ではじくようにする（定員削減。そのための教員削減も最終的にはやむを得ない）。
- 29) 目標を2段階に設定して、教科を分割し、Ⅰを必修で基礎的内容とし、大学院生などのチューターを配置して行う。Ⅱは従来の大学での学習内容まで持ち上げるものとして、選択とする。本気で低学力対策を行うなら、人的に教員の増員は不可避と思う。
- 30) 理想を言えば、レベル別のクラスを編成して、学生のレベルに合った講義をするのが一番よいであろう。入学者が数百人で多人数の教員がいる大きな学科であれば、そのようなことが可能であるかもしれないが、私が所属するような小規模な学科では、そのようなことは事実上、不可能である。限られたリソースの中で大学としてどのような取り組みが可能であるかは、今回のFD研修でぜひ学びたい。
- 31) 進級に関して教員の合意を形成すべきと思われる。
- 32) 歯学部との合同実習（例 解剖見学実習）
- 33) 本学学生に相応しい正課外の時間を利用した「学習支援体制」の構築
- 34) 自習室の充実。教員が積極的にFDに取り組みたいと思えるような環境づくり。
- 35) 入学前教育へのシステムティックな取り組み、3つのポリシーの策定、医療人の具体的中身と教育カリキュラムとの関係。
- 36) ①motivationの高い学生にきてもらう（本来、大学は勉強したいものが来る場所）ために、大学のアピール・入試など工夫する。
 ②上記の上で、学力がないだけ（やる気はある）場合には、ひとりひとりに懇切丁寧な指導も必要。それには多大な時間がかかる。教員にも時間的余裕がないとできない。そのあたりを考慮していただきたい。



氏名 _____ 連絡先 e-mail _____ FAX _____

今回のワークショップについて次の項目にお答え願います。

1. 低学力対応教育について

	理解できなかった	理解できた
意義	—	—
必要性	—	—
方法	—	—

2. 本学において、低学力対応教育を組織的に展開することは必要と考えますか。

・強く必要である ・必要である。 ・どちらでもない。あまり必要でない。全く必要でない。

5 4 3 2 1

必要な場合の理由は何ですか。

どのような授業を必要と考えますか。

どのような授業の工夫が必要と考えますか。

3. 本学の教育力向上の方策として、どんな方法があると考えますか。

4. 今回のFD研修について

1) 内容の価値 ・きわめて価値あり ・価値あり ・いづらか価値あり ・価値すくない ・価値なし

2) 内容の難易度 ・きわめて難しい ・難しい ・適当 ・平易 ・平易すぎる

3) 内容の時間配分 ・多すぎ ・多い ・適切 ・少ない ・少なすぎ

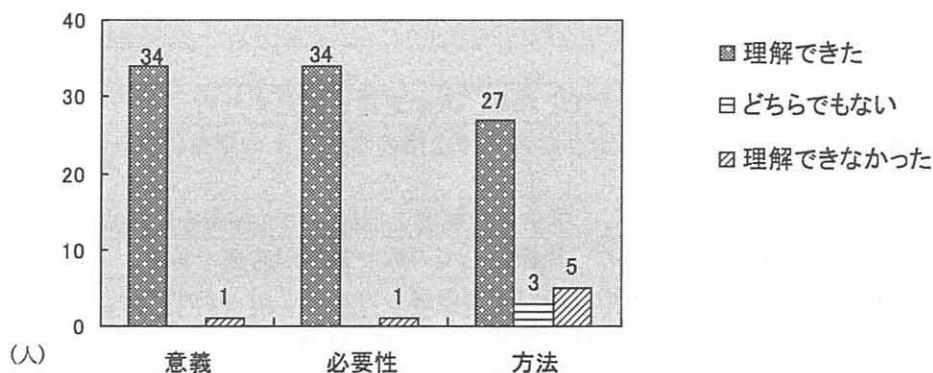
5. 今回のワークショップで良かった点

7. 今回のワークショップでの改善点

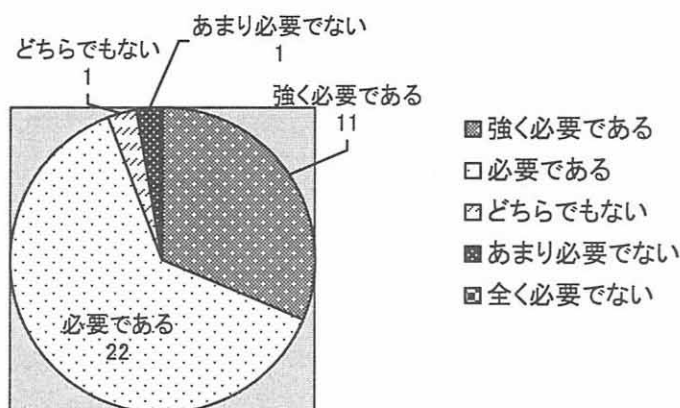
8. 今後のFD研修の提案

平成21年度北海道医療大学FD研修参加者ポストアンケート：ワークショップ総合評価

1. 低学力対応教育について



2. 本学において、低学力対応教育を組織的に展開することは必要と考えますか。



①必要な場合の理由は何ですか。②どのような授業を必要と考えますか。③どのような授業の工夫が必要と考えますか。

「強く必要である」

1)	①	今後も、多数の低学力の学生が入学してくるのが必至だから。
	②	学習スキル、態度・動機に関する初年次教育に関係する授業。
	③	少グループ形式の授業が必要と思う。
2)	①	低学力のため授業についていけない、卒業できない学生が増えてきた。
	②	授業がついていけるようなメイクアップ授業（学生に対して）。 学生のメンタル面のフォローアップ（授業ではなくカウンセリング）。 勉強のHow toについての授業（ノートのとおり方、etc）
	③	小テストを行い知識を定着。もしくは、学力のモニタリング。ノートのとおりやすい授業。

3)	①	特にH21年の学力の低下は気になり、今後の将来に危機感を持った。体系的な対策が必要。
	②	学生に何故だろう？そんなに必要な薬だったのかと、興味を持たせる授業展開が必要。
	③	視覚的に訴える、映像や画像を駆使した手法、実物を触らせるなど。
4)	①	国試の合格力+学士力を達成するための学力が低下しているため。
	②	補習（必要な科目の）。
	③	理解していない学生をモニタリングする方法。
5)	①	教員だけではフォローされないことも多くあると思うので、組織としての支援体制を整えていく必要があると思う。
	②	導入教育はとても必要だと思いました。
	③	記載なし
6)	①	社会のニーズに応じて選ばれる大学となり、入学定員を満たすため。
	②	国家試験合格率upに直結するような内容で合格のボーダ上の学生にターゲットをしぼる。
	③	小テスト、E learning を活用して学生の理解度を把握しつつ授業を組み立てる。
7)	①	教員の意識の共有化が必要であり、組織としての取り組みが必要である。
	②	受講時の基本的態度やノートの取り方（文章の書き方）などが、まず必要。
	③	自主的に学習する態度が身につく様な授業。e-learning 等。
8)	①	個々の教員の熱意に依存するだけでは限界があるため。また、個々の教員の motivation の向上のため。
	②	スタディスキルズを導入教育および各教科の導入部分、展開部分に組み込む。
	③	記載なし
9)	①	学生間の学力のバラツキが大きい。
	②	その場で理解可能な授業。
	③	情報過多にならないようにする。
10)	①	学生の教育支援。
	②	メイクアップ。
	③	少人数教育。
11)	①	本学の生き残りを図るため。学生の夢を打ちくだかないため。
	②	統合型授業。
	③	記載なし

「必要である」

1)	①	入学した学生が国家試験に合格しなければいけないので。
	②	必要な部分が過不足なく伝わる必要がある。
	③	学生の考えがフィードバックされる工夫が必要と思います。
2)	①	ノートの取り方、文章の書き方がわかっていないから。
	②	入学前教育、初年次教育での態度などの改善、文章の書き方などの習得。
	③	学生の参加意識を高めることなど。
3)	①	低学力というよりも、自ら学ぶためのスキルを体験し、得てほしい。大学は自ら学ぶところであることを早期に自覚させるため。
	②	誰もが理解できる授業もあってもよい。
	③	eラーニングのリアルタイムレスポンスの話しが興味深かったです。
4)	①	低学力な学生の場合、それ以外の問題がある場合もあるので教員全員が好きなように指導すると問題が複雑になることがあるかもしれない。
	②	1人1人をよく見る授業。基礎的なことからする。
	③	10数人での少人数での授業を行う。

5)	①	卒業、国試の基準に達しない。
	②	個別の指導と補習体制、基礎教養。体験的フィールド及び自主的参画の授業。
	③	基礎学力科目の基礎教養体制の充実。
6)	①	今後、対象となる学生数の増加が予想されるため。
	②	1. 大学で講義を受けるために必要な学習スキルが習得できる科目（例：適切なノートのとり方） 2. 補正講義。
	③	基礎的な内容をわかりやすく説明し反復学習させる。
7)	①	担任あるいは課目担当者ひとりで行うより大きく組織的に動く必要があることもある（両者の連携が必要）。
	②	ひとりひとりに目が届く授業（含：フィードバック）。
	③	フィードバック（学生の理解度チェック）機能が働く様に。
8)	①	多くの学部が国家資格を目指しているため、ある程度の学力が必要だから。
	②	学生の理解にあわせた展開。
	③	集中力が続くように、メリハリをつける。
9)	①	力がついていなくても合格できる講義があり、国試対策でまた勉強が必要。
	②	記載なし
	③	評価を厳しくする。
10)	①	教員が単独で取り組んでも改善が見込めないと思われるほど、深刻な現状であると思う。同じ目標を持ち、組織的に展開することが必要である。
	②	記載なし
	③	記載なし
11)	①	個人では対応しきれないから。
	②	わかりやすく、モチベーションを高める授業。
	③	理解度をチェック。
12)	①	個々の教員では対処できないため。
	②	多様な学生に対応できる授業。
	③	学生が後から復習できるような授業。
13)	①	本学の現状の把握と教員の意識の統一のために必要だと考えます。
	②	1年生の初期教育（大学で講義・実習をうけるためのスキルトレーニング）が必要だと思われまます。
	③	スキルの提示と実践。
14)	①	教育の質的向上。
	②	全体をレベルアップする授業。
	③	基礎的スキルアップ。
15)	①	共通理解のもとに、現状なども分析しながら効果的に実施できるのではないかと思います。
	②	学生が主体的に学べるような授業。
	③	ついて来られない。
16)	①	入学させた大学の責任。
	②	学生の理解を把握できるような授業。
	③	必要に応じた補習。
17)	①	卒業時の到達レベルを達成するために、それが困難な学生が一部だけいるので。
	②	学生のレベルに合った授業。
	③	視聴覚教材の活用。中間時点の学生の理解状況の評価とそれをふまえた内容の見直し。
18)	①	学生が有意義な大学生活を送れるため。
	②	授業というより個別対応が必要ではないか。
	③	記載なし
19)	①	大学全体が同じ問題に直面していると考えていると思うから。
	②	大学での授業や試験の形式を理解してもらうための授業。
	③	学生の理解していること、していないことを明確化し、次へつなげる。

20)	①	記載なし
	②	記載なし
	③	状況（学力）に応じた講義の変化（工夫）。
21)	①	多様な学生への対応のため。
	②	科目なのか中身なのかどっちかわかりません。 科目なら、基礎的な知識を補うような。体系的に展開される教員間で範囲に誤差が生じないとか。
	③	記載なし

「どちらでもない」

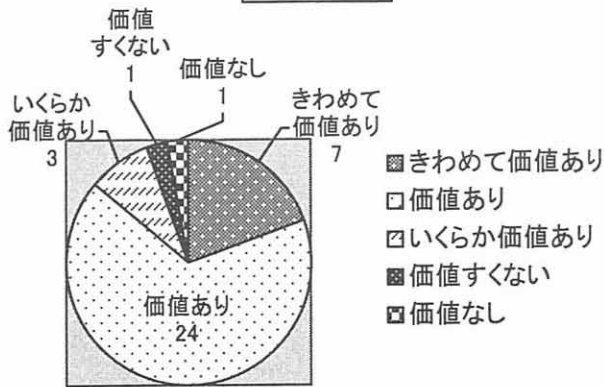
1)	①	記載なし
	②	学生が理解するだけでなく興味をもてるような授業が必要と思った。
	③	記載なし

3. 本学の教育力向上の方策として、どんな方法があると考えますか。

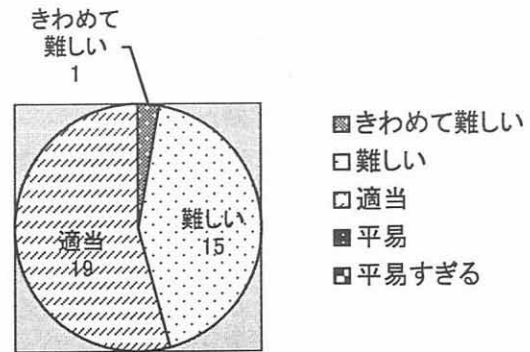
- 1) FDの充実。
- 2) 指導者側の対策。
- 3) 教員各自が工夫する。
- 4) 教育力の低い教員の再教育プログラム。教育力の高い教員のリクルート。
- 5) 教員全員が共有することが必要であり、そのうえで学部内の教員間できちんとコンセンサスをとった上で、教育を行う。
- 6) 1. 個々の教育の力を上げる。 2. 1のみでは限界→マンパワー上げていただく必要あり。
- 7) 教育にたずさわるすべての人の教育に対するモチベーションを上げるためにWSに参加してもらう。学部の壁をこえた交流会を行う。
- 8) 向上のための組織づくりと情報の共有化。
- 9) 学生の学力の共有化。
- 10) 学生、授業の現状の情報共有化、教育学の専門家のセミナーを通して、他者との比較や参照ができ、自身の日々の教育実践の振り返り（新人教員にとっては、他者や専門家の実践がガイドラインとなる）を促進すること。
- 11) 各学部合同で研修会を行う。今回のFDの内容は、全教員で把握する必要があると思う（学生の状況について）。
- 12) これは教員の能力のことを言っているのだろうか？ならば教員にたいする研修が良いと思う。
- 13) 学力の継続的なモニタリング→対策。
- 14) 入学前教育などの全学的取り組み。
- 15) 導入教育の充実。
- 16) 入学時点から、継続した、個別のフォロー体制。
- 17) 正課外時間帯における、学習支援の体制整備。
- 18) 基礎学力科目の基礎教養体制の充実。
- 19) カリキュラムの洗いなおし。
- 20) 本来の教育を充実させることを常に第一に置く。自学習のスキルを早期に身につける。
- 21) 受講時の基本的態度やノートの取り方（文章の書き方）などが、まず必要。
- 22) 学習のやり方から教える。
- 23) 学生のモチベーションの向上。学生の勉学のやり方（How to）の修得。
- 24) 少人数のグループ学習。
- 25) レベル毎のクラス編成授業。
- 26) 一人ひとりが意識するような（させるような）システムが必要。
- 27) まず問題点を現場からピックアップするのが良いと思います。
- 28) 評価基準の明確化による適切な評価→適切な講義 etc につながる。
- 29) 下位 50%の国家試験対策→合格率を短期的に上げる。

4. 今回FD研修について

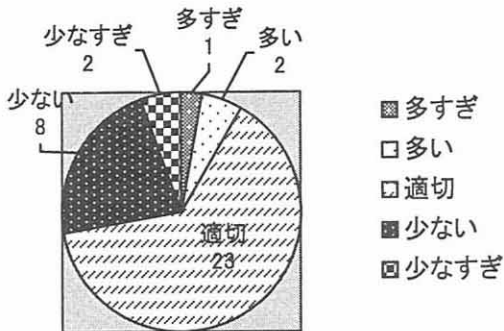
内容の価値



内容の難易度



内容の時間配分



5. 今回のワークショップで良かった点

- 1) ・他学部・学科の学生の様子を知ることができた。
・他学部・学科の教員と意見交換ができた。
- 2) 他学部との情報交換。(2)
- 3) 他学部の先生と交流できた。(3)
- 4) 他学部の教員とフランクに意見交換できた。
- 5) 他学部の教員とのネットワークが広がったこと。
- 6) 普段接することのない教員と、教育について話し合い、考え方などを知ることができた。
- 7) 各学部の教員と問題を共有できた。
- 8) 「低学力対応教育」という言葉が好きではなかったのが、自分以外にもいるということを知ってホッとした点。
- 9) 実態が明確になった。交流が図れた、具体的案も参考になった。
- 10) ・他の学部の方と話げできた。
・他の先生の工夫を聞いた点。
- 11) 色々な教員の話が聞いた。
- 12) 他の学部の現状を知ることができた。
- 13) 他の学部のことがすこしわかった。
- 14) 他学部及び今の1年生の現状が聞いた。
- 15) 他学部・学科の状況がわかり、共有できたこと。(2)
- 16) 大学の現状理解、学部を超えた問題の共有。

- 17) 各学部での現状が明らかになったこと。その現状を教員がどのように捉えているのかが見えてきたこと。
- 18) 自分自身の授業について考えさせられた。
- 19) e-learning の現状がわかった点。
- 20) ・様々な問題点があがったこと。
・どの学部でも似た様な問題点があり、大学全体の問題として議論できるようになったこと。
- 21) 学部間の問題点の把握ができた。
- 22) 学生対応協議。現状問題点の協議。
- 23) 宿泊しなくてよかった点。短い時間でしたが有意義でした。
- 24) 体力的に楽。
- 25) グループに各学部が適度にばらけて入っていた。
- 26) 各学部の人がまじり、話し合いができて良かった。
- 27) 「工夫された授業」として他学部の教員の話に自分も講義で行えるアイデアが多くあったこと。
- 28) 授業の方法（工夫）が参考になった。

6. 今回のワークショップでの改善点

- 1) 作業に追われている感じがあった。一つのWSでもう少しディスカッションできる時間があるとよいのではと感じた。
- 2) WSをつめ込みすぎているように思います。もう少しじっくり討論できるよう配慮いただけたらと思います。
- 3) 時間が十分でない（討議不足）（4）
- 4) WSの時間が少ない（特に1日目）
- 5) WSが多すぎる。
- 6) 時間配分。
- 7) 時間配分を確実に。
- 8) 時間どおりすすめてほしい。
- 9) 時間通りに進まなかった。その都度修正していただきましたが、落ちつかなかった。
- 10) ちょっと長い。時間を取り過ぎ。
- 11) 発言を促す(?)、強制する方法？
- 12) 課題が少しわかり難かった。
- 13) 参考教員の選択とテーマ。これらのことについて検討が必要。
- 14) パワーポイントで発表すると1人に作業が集中するとのことだったが、OHPでも同じだったので、最初から電子媒体にした方が良いと思いました。
- 15) 1班当たりの構成人数が多過ぎ。
- 16) 会場が狭いので他グループの討論に気が散ることがあった。
- 17) 4月からいらしたばかりの先生にとっては、現状をふまえて、効率的な方策を考えるのが大変だったのではないのでしょうか、と思いました。
- 18) テーマがすでに用意されているのであれば、それを最初に見て良く理解した上で行ったほうが良いと思いました。WS1がよく理解できません。
- 19) テーマが大きいのので、もう少ししぼって欲しかった。
- 20) 参加者全員から参加動機と参加後の感想を口述してもらう時間と機会を設定する。
- 21) 1日だけの参加はどうなのでしょう？
- 22) もう少し休憩時間が欲しいです。
- 23) サテライトキャンパスで行ったのは、とても良いと思った。
- 24) 悪いところなし。
- 25) 改善点なし（現状でよい）
- 26) 特になし（蛇足ですが、お弁当はもう少し軽めでよいかと思いました。）

7. 今後のFD研修の提案

- 1) 大学の中でタイムリーに課題になっていることが研修内容として、取りあげられるとよいと思った。
- 2) 各大学（各国）のFD対策とその効果。
- 3) もう少し時間が短くても良い。
- 4) 今後義務化されるそうですが、研修参加者募集型（open）にしてはいかがでしょうか。
- 5) 教育力の低い教員（授業評価アンケートの点数の低い教員）を優先的に参加させるべき。
- 6) 新たに授業を増やそうとしても難しいので、形式的なシラバスを作るよりも、講義で気をつける点や改善する点を話しあうほうが使いやすい。
- 7) FD研修についてのアンケートは無記名にすべき。
- 8) 上手い授業方法のモデル、見本の講義。
- 9) 実現可能なプロダクトをしぼって次回のテーマとし具体化する。
- 10) 学生への対面指導法。
- 11) 『国家試験合格率を上げる!!』
- 12) 国家試験対策の有効な策について。
- 13) 特別な研修というよりも、他の学部の現状を知ったり、意見交換の機会があった方が良い。
- 14) 宿泊型と、今回の非宿泊型FDとの比較が可能となり、意見の整声があれば参考にする。
- 15) 宿泊にする必要はないように思う。
- 16) サテライトキャンパスで行ったのは、とても良いと思った。
- 17) 学生代表も呼ぶとか。
- 18) オープンキャンパス等大学全体の行事と重ならない方が助かります。



資 料

資料1

学力・低学力をめぐるキーワード 大学教育開発センター検討会から

本学でいう低学力とは 国家試験に合格しない(試験の点数が低い)学生 だが?

低学力の要因

- ・入学入試 進級試験 卒業試験
- 進級 留年 退学
- ・初年時学生の学力 低学力
- ・国家試験を落ちた学生 どんな学生か 現状把握

学力とは

- ・低学力とは 国家試験に合格しない(試験の点数が低い)
- ・試験で測れない学力

意欲(モチベーション) 意欲低い → 低学力

ミスコミュニケーション → 低学力

人間力 コミュニケーション能力 問題解決能力 応用力

社会性(たとえればレポート提出を求めても提出しない)

国家試験のない学部学科とある学部学科

学力 高い学生は 同じ だが、低い学生はますます低くなる

格差社会化

- ・別の視点: 発想の転換

課題

- ・初年次科目(導入教育含む)の授業で、モチベーション形成等、学習法の修得等を取り込む
- ・知識を基礎とする授業(英語など)で学習能力を身につける方策をつける
- ・進級・卒業判定に結びつく学力判定の基準の明確化と指導体制:GPAを利用した指導など
- ・学力・意欲に問題のある学生の発見と指導(→FD体制、担任制)
- ・入学時から卒業までの学力を把握し、各学部・学科、全学での対応組織、対応内容(国試対策も含めて)

資料2

シラバスの様式

シラバスは、授業を提供する大学が責任をもつものである。その形式は、標準化されていなければならない。全学教育は、全学的な立場から授業を提供するので、学部によって形式が異なることはありえない。そのため、平成21年度に、全学教育が開始されるにあたって、以下のような様式に統一することにした(全学教育実施委員会)。また、専門教育、大学院教育のシラバスも同様の様式にしていることが方向付けられた。この様式は、国際的に、通用する標準的な形である。

以下の様式例では、記入要領は、イタリックで表している。記載のポイントは、1) 学生の学習計画として記載される。これにより、教員中心から学生中心への意識変化が条件となる。「・・・を教える」とは書かないで「・・・を学ぶ」と書く。2) はじめに学習の目的・目標を表現する。これは、大学・学部・学科の教育目標と整合性が求められる。医系系の教育では、目標は、教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」とを含む。一般目標は、何のために学ぶかの目的を含み、学主目標を概念的に表す。一方、行動目標は、学習の具体を視察可能な言葉で、具体的に表す。これは、成績の評価の基準設定でもある。一般目標・行動目標は、医・歯学系のコアカリキュラムでは、一般目標、到達目標として表す。一方、行動目標は、学習の具体を視察可能な言葉で、具体的に表す。これは、成績の評価の基準設定でもある。一般目標・行動目標は、医・歯学系のコアカリキュラムでは、一般目標、到達目標として表す。成績評価についても、具体的に表す。履修教員で担当する場合も、担当教員名は明記され、その科目は一つの科目として、周到に設計されていることが求められる。そのため、担当責任教員(成績評価責任教員)1名が明記される。

詳細は、本学の冊子「FDハンドブック:大学教育の設計」(FD委員会)を参考にされたい。

以下、イタリックのシラバス記載要領にしたがって記載し、完成してから、イタリック部分は削除する。

種類: 科目区分:

科目: 科目名 授業題目: 授業題目名

講義担当者名: ○河合太郎 神童一郎
1年生 前期 必修 2単位

種類には、教養教育・基礎教育・医療基礎教育のいずれかをいれてください。

科目区分と科目は、授業題目の所属をあらわします。全学教育科目の分類から選んでください。

授業題目は、とくに、教養教育、医療基礎教育では、授業の内容を具体的に表す題名をつけてください。基礎教育では、学問名からくる科目名と一致しても結構です。

履修で、授業を担当するときは、授業責任者に○をつけてください。

必修・選択の区分も明らかにしてください。

【概要】

科目名のみでは内容がわかりにくい場合、どんな科目かなどの内容を文章で説明をしてください。できるだけ短く、簡潔に説明してください。たとえば、「この科目は、看護学を学ぶ基本として、人体を理解するために必須の人体の仕組みと働きを学ぶ。」など、科目の趣旨も表現できます。文法は、以下も「である」体としてください。専門性との関連を説明することも効果的です。全体のカリキュラムでの科目の位置づけ、意義なども表現するとよいでしょう。ただし、長くなりませんように。

【学習目標】

ここには、学生が授業を受けた後ができるようになるかを簡潔書きで表現します。一般目標と行動目標を簡潔書きで表現してください。一般目標と行動目標は、専門用語です。この言葉は用いず、はじめに2, 3の一般目標、うしろにいくつかの行動目標を順に表現します。表現にはつぎの原則をふまえてください。

- 1) 一般目標は、一般目標は学習の成果を、概念的に表現します。
- 2) 学生を主語として書きますが、主語は省略します。
- 3) はじめに、学習の目的を明らかにするために、「・・・ために。」をいれてください。
- 4) 目標分類 (認知・態度・技能) を総括的に含め
- 5) 複雑な概念をもつ動詞、総括的な概念をもつ動詞をもちいて表してください。
知る 認識する 理解する 感ずる 判断する 価値を認める 評価する
位置付ける 考察する 使用する 実施する 適用する 示す 創造する
身につける
- 6) 行動目標は「理解する」のような概念的言葉でなく、学習の結果えられる成果を観察可能な行動を具体的に表します。試験 (成績評価) を想定するとよい。
- 7) 一般目標と関連しているはです。
- 8) 全体のバランスよく含まれるようにする。
- 9) つぎのような、観察可能な動詞で、知識、態度・習慣、技能をわけて、到達レベルを表現してください。また、各領域をバランスよく含めてください。

知識の領域

列記する 列挙する 述べる 具体的に述べる
説明する 分類する 比較する 対比する 類別する 関係づける 解釈する
予測する 選択する 同定する 弁別する 推論する 予測する 公式化する
一般化する 使用する 応用する 適用する 液解する 結論する 批判する 評価する

態度・習慣の領域

行う 尋ねる 助ける コミュニケートする 寄与する 協調する 示す
見せる 表現する 始める 相互に作用する 系統立てる 参加する
反応する 応える

技能の領域

感ずる 始める 模倣する 熟練する 工夫する 実施する 行う 創造する
操作する 動かす 手術する 触れる 触診する 調べる 準備する 測定する

【学習内容】

目標を達成するために、順に授業をすすめます。これは学生の学習計画でもありますので、各回の授業内容を具体的に表現します。目標達成のために多様な授業法を駆使します。

授業方法もわかるようにします。宿題、中間試験も表現します。中間試験 (形成評価) もおこない、互いのフィードバック (授業の仕方、学生の学習の仕方途中把握) も重要です。

以下の枠に表現してください。

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。	河合太郎 神重一郎
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

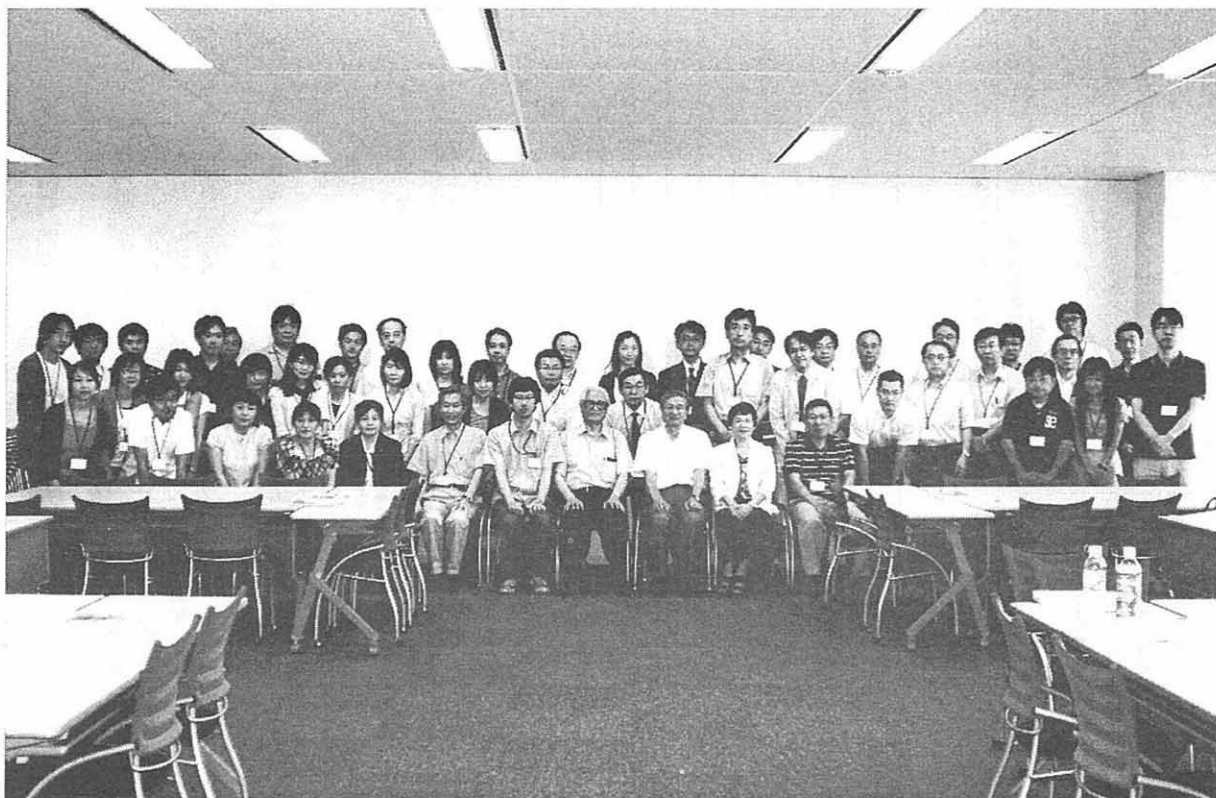
位教数と授業時間 (授業回数) は、科目によって決められています。シラバスに書かれた授業回数 (一般には、半期 15 回、定期試験は含まれない) は、授業を実施する責任があります。

【評価方法】

評価の方法を書き、それぞれの割合を書きます。
たとえば、レポート 20%・学習態度 10%・中間試験 30%・定期試験 40%
さらに具体的なことを書いてもよい。

【備考】

教科書
参考書
その他



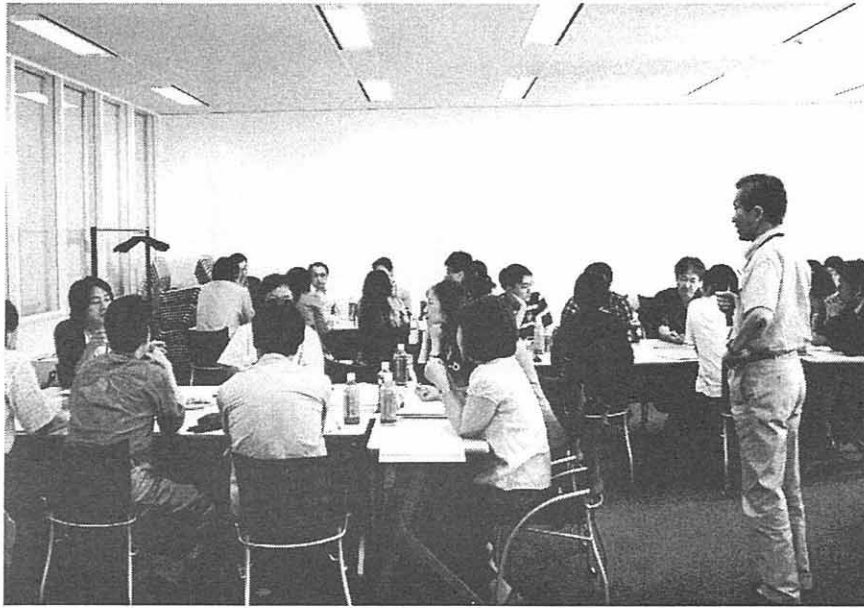
研修会場にて 笑顔で記念撮影



開会にあたり・・・



参加者「自己紹介」



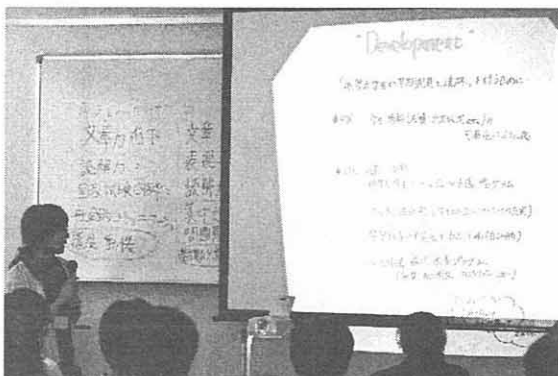
グループ毎に、討論開始



グループワーク：KJ法を用いて・・・



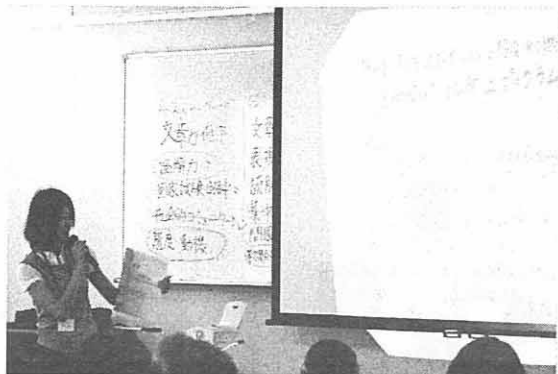
グループワーク：意見を集約すると・・・



発表：「低学力学生の早期発見と追跡」を行うために・・・



WS 3：改善の目標設定



発表：「モチベーション向上プログラム」



発表：「医療大式 国家試験に合格できる
ノートのとり方」



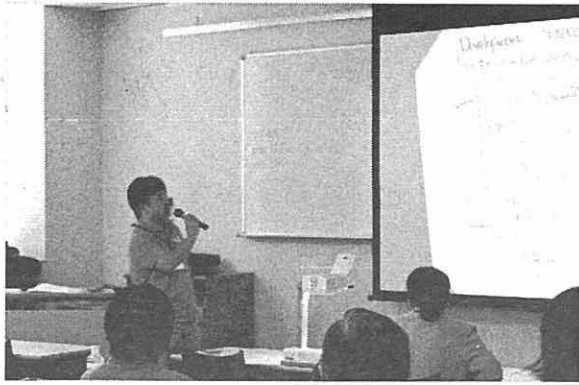
「学力に焦点をあてた 工夫された授業」— 質疑応答



ミニ講義：低学力対策 e-learning について



今日は、WS 4から始めましょう



発表：「学生学力レベルアッププログラム」
目標達成のための方策について



WS 5：提案プロジェクトの具体化・実現を
はかるための組織・体制を設計する



最後の発表に向けて・・・



各グループ発表後、自由討論へ



2日間の研修の成果は・・・



北海道医療大学

Health Sciences University of Hokkaido

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

TEL: 0133-23-1211 (代表)

ホームページ: <http://www.hokuriryou-u.ac.jp/>